

**第 33 回
大阪大学言語文化学会
大会資料集**

**日時:2008 年 6 月 28 日(土) 13:00 より
会場:大阪大学大学院言語文化研究科棟
2 階大会議室**

主催:大阪大学言語文化学会

目 次

研究発表 13:20-16:30

第1室 言語文化研究科棟2階大会議室

1. 現代台湾のメディア市場における「御宅族」、「宅男」の一考察
—混成された「オタク像」の過剰消費— 金 想容 (1)
2. 植民地教育を受けた台湾の「日本語人」における日本への視点
—日本語による会報誌『友愛』の分析をもとに— 陳 麗華 (5)
3. 台湾における日本へ留学する大学院生の自律性を高める会話教育
—アクションリサーチを通じて— 林 盈萱 (9)
4. 日本語漢字語彙の意味形成の一考察
—台湾人日本語学習者を対象に— 郭 毓芳 (13)
5. 中国系留学生間の会話における日本語コードスイッチング
—言語表現の補足としての機能を中心に— 張 巧榛 (17)
6. カナダ・バンクーバーにおける中国系コミュニティの言語使用に関する一考察
—アンケート調査と文献資料の分析から— 藤井久美子 (21)

第2室 言語文化研究科棟1階大会議室

1. 農耕の起源およびその営みを語る日本神話における女神および男神のイメージ
Shchepetunina Marina (25)
2. 日本語虚構テクストにおける重なりと移動 上田 恭寿 (29)
3. マンガのオノマトペ表現にみる造語のパターン：認知言語学的観点から
井上加寿子 (33)
4. ‘It is adjective of DP to VP’ 構文の統語構造 玉木 晋太 (37)
5. Possessive Relation Disambiguation of Japanese Genitive Marker *No* 西口 純代 (41)
6. コーパス駆動的アプローチによる議論文の語彙的特徴分析 三木 望 (45)

現代台湾のメディア市場における「御宅族」、「宅男」の一考察 —混成された「オタク像」の過剰消費—

大阪大学言語文化研究科 博士後期課程2年

金 想容 (kiv301ks@ecs.osaka-u.ac.jp)

1. はじめに

- ・日本から台湾への文化流入:「日本発」のポピュラー文化は台湾の消費市場において多大な影響力を持っている。
- ・日本の出版物、映像商品:90年代以前に法律的な審査や規制がなく、海賊版も法律体制の外側に置かれていたため、台湾社会で広範な読者を有している。洪(1998)が主張したように、日本マンガやアニメの浸透は深く、外来文化消費財として広大な市場が存在しており、受容の度合いも非常に深い。
→97年の「日本大衆文化ブーム」を経て、今台湾で最も注目されているのは、近年世界中のサブカルチャーにも影響を与えている日本の「オタク文化」である。本発表では、日本のオタク文化を起源とする「御宅族」^{ユツァイク}、「宅男」^{ツァイン}、すなわち台湾内部における「オタク像の生成/消費」に着目したいと思う。

2. 本研究の視座と目的

本発表では、以下の三つの側面から、最初の試みとして台湾「オタク文化」の考察を進める。

2.1 「オタク像」の変遷から

- ・「オタク」:エッセイストの中森明夫氏(1983)により指摘され、漫画、プラモデル、鉄道模型が好きな若者を指す言葉であった。1989年宮崎事件²に関する報道の影響で、「オタク」は強い否定的ニュアンスをもって日本社会で広まっていた。広辞苑³では「特定の分野・物事にしか関心がなく、そのことには異常に詳しいが、社会的な常識には欠ける人」といった注釈が出てくる。
- ・岡田(1996):「オタク」を世代別に整理し、新たな視線で見直した。「映像に対する感受性を極端に進化させたニュータイプ人間達」、「高度な情報分析能力と発信力を持ち…日本文化の正統継承者である」。
- ・野村総合研究所(2005):市場規模及び消費特性によってオタク層を5つの類型⁴に区分し、日本企業のマーケティング活動に生かす方法を提案。
→日本のオタク文化が台湾にも浸透し、現在に至って「御宅族」、「宅男」などの新語まで生まれた。本発表では、この数年間の台湾の新聞やテレビ、インターネットなどのメディアによるオタクの記述を総合的に考察し、それらの単語の由来と意味合いの変化を究明する。

2.2 消費市場の視点から

消費市場がメディアから必要なメッセージを拾い、作り上げた物語は、その消費の文化空間に参与する受け手にとってダイナミックなものである。

→本発表では、各メディアの動きを考察することによって、台湾の消費市場における「オタクイメージ」は如何に創出され、さらにメディアの再生産により、彼ら自身が一つの「物語」として消費されている現状を分析する。

2.3 グローバル化の観点から

グローバル化が進行していく中で、ローカル文化空間は様々な文化の相互作用によって能動的になり、外来と在来の混合がしばしば見られる。台湾は80年代以降、高度消費社会へ構造転換をし、政治と社会全体が開放的になっており、外来文化財をより積極的に取り入れていると思われる。

→この背景に基づき、本発表では、日本からのオタク文化が台湾で受容される際に、メディアや消費者によって如何に再解釈されているか、また、台湾特有の要素も混在していることを明らかにする。同時に、現代

¹『漫画ブリッコ』で中森氏が1983年に連載した『「おたく」の研究』である。その中でアニメや漫画の愛好者が二人称として「御宅」という語を使うことから、おたくと呼称することが提案された。しかしこれらの記述が、アニメマニアや漫画マニアの幼児性をあげつらうような蔑視的な性質であったこともあり、読者の間でも論争となっていた。

²幼女連続殺害事件の容疑者である宮崎勤が、アニメや特撮のビデオ収集・漫画収集を他人との交流無しで行っていたので、マスコミが「オタク」という言葉とオタクと呼ばれる人々たちをステレオタイプ的に捉えて利用したという。

³広辞苑第6版(2008)により。

⁴日本のオタク層は延べ330万人であり、およそ2700億円の市場規模を持っているという。オタク層の5つの類型とその割合は、家庭持た仮面オタク25%、我が道を行くレガシーオタク23%、情報高感度マルチオタク22%、社交派強がりオタク18%、同人女子系オタク12%となる。

台湾の消費社会に立脚しつつ、「オタク現象」の有する可能性を解説し、グローバルな文化の移転と再構築のメカニズムを検証したい。

3. 台湾における「御宅族」、「宅男」

3.1 「日本ACGファン」=「御宅族」

台湾では、2000年代まで日本の「アニメ、コミック、ゲーム」に熱中する人達に対し、「ACG ファン」という呼び方が使われていたが、「オタク」という名称はまだ知られていなかった。

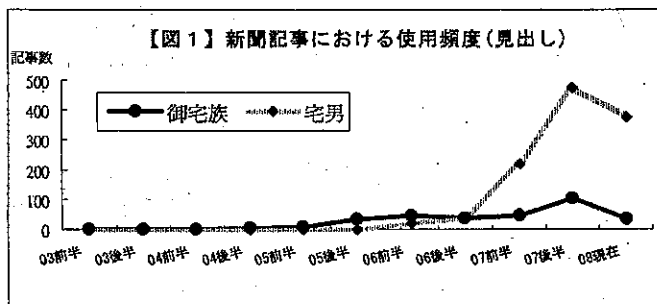
発表者の調査によると、2002年8月23日の『中国時報』にあった、岡田斗司夫の著作『オタク学入門』を紹介する記事が「御宅」という言葉を使用した最初の例であり、その後も岡田の主張が受け入れられつつ、フィギュア収集や同人コスプレの愛好者達を「御宅族」と呼ばれるようになった。

・2007年11月に、台湾現代芸術界を先導する台北市立美術館が、特別展として「海洋堂⁵と御宅族文化」展示会を開き、日本のアニメ、漫画のフィギュアを3000点ほど展示していた。その芸術的価値について賛否両論を巻き起こしたが、歴史的な参観人数を記録した。

→この話題性の高い展示会の影響もあり、台湾における「御宅族」とは、日本のように広義には解釈されず、日本漫画、アニメ、ゲームなどの愛好者を指してのみ用いられていると思われる。

3.2 『電車男』から生まれた新種「宅男」

- ・日本映画『電車男』の大反響⁶→主人公の「オタク」イメージ(アキバ系⁷オタク)の浸透。
- ・台湾の大学生を中心とした最大級コミュニティ型のWebサイトの「PTT実業坊」(前身はBBS形式)にも、電車男に関するコミュニティが多数作られ、一時話題になっていた。その中で、一部の読者が「御宅」(「宅」=「家屋」)にちなんで、「宅男」、「宅女」、「阿宅」(宅ちゃん)と自称し始め、2005年の後半から2006年の前半にかけて、それらの呼称が「家にいることが好きで社交嫌いの若者」という意味合いで広まっていた⁸。
- ・台湾の4大新聞誌⁹を対象に、「御宅族」、「宅男」が入っている記事数を集計した結果:(図1を参照)



- ・02~03年:殆ど無し
- ・04~06年前半:「御宅族」>「宅男」
- ・06年後半から:「宅男」が注目され始める。
- ・07年以降:「宅男」の使用度が急増。
→「宅男ブーム」に。

・コミュニティサイトでの発言とメディアの宣伝を考察→「宅男」がさらに二種類に分けられる:

- ①「ソフト宅男」(軟宅男) —主にマンガ、アニメ、キャラクター商品などのソフトウェアに没頭する宅男。日本の「アキバ系オタク」イメージとほぼ一致している。
 - ②「ハード宅男」(硬宅男) —「3C商品」¹⁰などのハードウェアに関する知識に熟達している宅男。台湾の理系大学生の一般的なステレオタイプの表象に近いと考えられる。
- ・趣味や性格は対照的であるが、特定の領域においての専門知識が豊富という点では近似している。

⁵「株式会社 海洋堂」は、日本の模型業界で高い造形技術で有名な、フィギュア、食玩など各種模型を製作する企業である。造形物の精巧さや造形センスは世界屈指の水準を誇り、毎年「ワンダーフェスティバル」という世界最大級の模型展示イベントを主催している。本社所在地は大阪府門真市である。

⁶皇冠出版社、龍祥育樂多媒體股份有限公司(2006)の発表によると、2005年4月に『電車男』の中国語版が発行され、3カ月で52万部を突破し、同年8月に上映された映画版『電車男』も一週間で2000万円の興行収入に達した。近年一番注目されていた日本純愛小説『世界の中心で愛を叫ぶ』を上回るほどの絶大な人気を博した。

⁷「東京秋葉原の近辺に居そうな服装・行動をするオタク」という意味であるが、メイド喫茶やキャラクターグッズに熱中する人々を揶揄する意図で、これに傾倒する側のステレオタイプのイメージの総称。

⁸代表的なサイト「宅男の部屋」の中で、「宅男」の特徴が以下のように記載されている: 1. 必要でなければ外出しない。(能不出門就不出門) 2. パソコンに向かっては話し上手だが、電話での対応はいまいち。(電腦螢幕前妙語如珠, 電話筒上勉強應答) 3. 何かに対して夢中になり熱中しており、とりわけパソコンやネット関係のものに詳しい。(專精並沉迷於某些事物, 經常是電腦、網路) 4. ACGを強く愛し、ACG文化を絶え間なく勉強し続ける(無法抵擋對ACG的偏愛, 以及對ACG文化無止境的進修) 5. 何かを集める習慣がある。(有蒐集的習慣) 6. 『電車男』を見て泣いたことがある。(看電車男時, 哭了) <http://ias9.blogspot.com/2007/04/11.html>

⁹台湾行政院新聞局(2007)の発表により、発行部数が最も高い4大新聞誌は、「中国時報」、「自由時報」、「聯合報」、「蘋果日報」である。

¹⁰「3C」商品とは、パソコン(computer)、通信商品(Communication)、消費性電子商品(Consumer Electronics)。台湾のIT業界で定着している専門用語。

- ・台湾における「宅」：主に「引きこもり」のイメージを表す名詞、形容詞になり、「宅男」は日本との関連性の強い「御宅族」を内包し、さらに特定な領域に詳しい男性だと解釈されつつあることが分かる。

3.3 台湾の新聞記事における「宅男」の使用状況

2007年「宅男」を用いた各分類の記事本数及び使用例(計986本)：

分類	見出し使用例の日本語訳(一部抜粋)	本数	割合
国際・政治	「謝長廷：落選後は宅男になり、今後の道を模索」、「台北市長が『宅男市長』と名づけられた」	79	8%
国内・社会事件	「宅男が三日連続ゲームをやり、脳卒中に」、「大学院宅男が援助交際を」	266	27%
経済・IT	「宅男ら、消費市場の革命を起こす」、「保険商品も宅男をターゲットに」	118	12%
生活・文化	「出かけよう！宅男パレードに参入」、「林榮三文学賞エッセイ部門『宅男物語』が受賞」	207	21%
エンターテインメント・ファンクション情報	「宅男ファッションが今年の流行に」、「リア・ディゾン台北コンサート、宅男1000人殺到」	316	32%

- ・「宅男」はあらゆる分野で使われ、社会事件のような「価値を理解しがたいサブカルチャーに没頭」、「直接的なコミュニケーション能力に劣る人」といったネガティブなイメージから、「潜んで出世の機会を待つ人間」、「次世代消費文化のリーダー」、「特定の事物に関心と知識を持つ一種のエキスパート」といった肯定的なイメージまで、台湾における「宅男」の意味する範囲がさらに大きくなり、台湾本土の政治、社会、経済状況により常に変化し、在来の要素が混合しつつあると考えられる。

4. 消費される対象への転換

4.1 パライエティ番組―「宅男」を变身させよう！

2007年から台湾のテレビ放送局が「宅男ブーム」に便乗し、「宅男大变身」、「宅男大改造」などの企画を立て、一見おしゃれと無縁な参加者達が、デザイナーや美容師のプロの技で魅力的なイケメンになる、という共通のプロセスで、「宅男」そのものを商品として売り出そうとしている。いずれのケースでも最後に「宅男の自信を取り戻すことによって、人との頻繁な交流を勧める」という正当な趣旨が強調されている。しかし、「宅男」と呼ばれている参加者は、外見を変えることができても、内面まで改造することができない。

4.2 消費市場における「宅男」の氾濫：

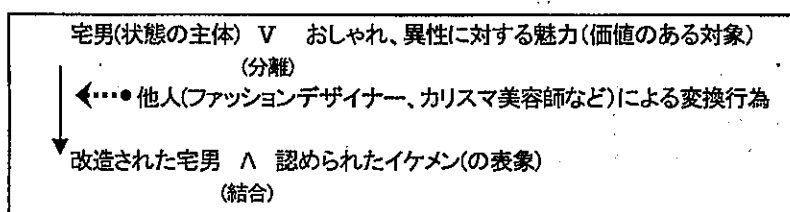
こうした動きは台湾メディア市場で盛んになり、視聴者の支持を得たため、各業界は様々な手段で「宅男」を商品化し消費者の関心を引こうとしている。

- ・ポップ音楽：台湾歌手 Jay Chou(周杰倫)07年のヒット曲『陽光宅男』(訳：陽気な宅男)
- ・大衆文学作品：『正妹大学―宅男大改造』、『宅男情人』など
- ・演劇：ミュージカル『宅男的異想世界』
- ・コミュニティ型 Web サイトのイベント：「醒醒吧！阿宅」(訳：目覚めろ！宅ちゃん)

4.3 「宅男消費」の物語分析

フランスの言語学者グレマスが提唱した「行為者モデル」理論¹¹によると、物語に登場する人物が行為者として物語の機能を果たし、行為者の相互関係によって全ての物語は規定されている。

グレマスの理論に基づき、台湾における「宅男消費」の構造を解釈してみると、以下の図式となる：



→メディアの製作側がこのような単調で分かりやすい物語を作り出しつつ、台湾の観客もこの「改造するプロセス」及び「変形後の表象」に魅了され、購買行動まで促されている。

- ・「宅男」という再構築された文化装置が、ほぼ同じパターンで台湾のメディアに利用され、過剰に消費されていると言えるだろう。

¹¹ A・J・グレマス 田島宏ほか訳 1988『構造意味論』紀伊国屋書店

5. まとめ

5.1 混成/多様化されたオタク像:

台湾における「御宅族」、「宅男」とは、インターネットの普及と情報流通の迅速さによって、顕在化してきた一種のサブカルチャーであり、そして日本のオタク文化が全面的に理解されていない上で、メディア及び消費者による混成の産物でもあると考えられる。また、「御宅族」は「日本ACGファン」として定着し、直接的な日本要素を保っている一方、「宅男」は台湾特有のオタク表象と交じり合い、新たな意味を生み出したと言えるだろう。

5.2 消費市場における「新典型」へのシフト:

「宅男」は新しい意味合いを与えられただけでなく、「宅男」そのものが「改造/再生できる商品」として台湾のメディア市場で過剰消費されている。日本大衆文化ブームで生まれた「哈日族¹²」と異なり、「消費/被消費」2つの特質を持つ典型として定着していくと思われる。

5.3 グローバル化とローカル化の交差:

「宅男」という表象には台湾本土で生じた要素が混在しており、さらに商品化されていることから、日本の大衆文化を受容しながらも、文化伝播のローカル化も同時に作用していることが分かる。今日の日本でもオタクを再考する動き(岡田 2008)が目立っているように、台湾における「御宅族」や「宅男」など日本由来の「オタク像」は、今後も変化していくだろう。

日本大衆文化はメディアの表象と実際の消費に接合する際、ローカルと区別するために重要視されるが、浸透していくにつれて日本との関連性から脱却する傾向が形成されると思われる。台湾独自の消費文化文脈に適合させつつ再構築を重ねるプロセスは、一種の「タイワンナイゼーション」の可能性を示唆していると考えられる。

6. 今後の課題

- ・台湾内部の「オタクイメージ」の生成とその消費性を踏まえ、消費者側の実際の読み取りと、「御宅族」、「宅男」の行動様式についても考察したい。
- ・オタクをテーマとしたアメリカドラマ¹³の台湾での高視聴率から、「オタク現象」にはアメリカの影響の有無も検討する必要がある。

主要参考文献・資料

日本語文献

- 東 浩紀 2001『動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会』講談社
 アダム・ジャン＝ミシエル 末松壽ほか訳 2004『物語論—プロップからエーコまで』白水社
 岡田斗司夫 2001『オタク学入門』新潮文庫
 岡田斗司夫 2008『オタクはもう死んでいる』新潮新書
 大塚英志 2004『物語消滅論』角川 one テーマ 21
 中森明夫 1983『おたくの研究(1)、(2)』漫画ブリッコ
 野村総合研究所 2005『オタク市場の研究』東洋経済新報社
 間々田孝夫 2007『第三の消費文化論』ミネルヴァ書房

中国語文献

- 陳仲偉 2005『日本動漫畫の全球化與迷的文化』唐山出版社
 高千恵 2007『宅/00年代空間感』藝術家 64 卷 4 期
 洪德麟 1998『台灣漫畫五十年經緯』歷史月刊 10 月號
 廖慧淑 2005『電車男帶來新希望』30 雜誌 No. 10
 劉子倩 2007『消費與慾望/海洋堂與御宅族文化』現代美術 135
 楊迺仁 2007『御宅族們 奮起吧!』COMPOTECH 第 102 期
 ZERO 2007『嗜好, 改變了都市的風貌/秋葉原御宅族與海洋堂』建築 120 期

台湾新聞雑誌データベース

『中時新聞資料庫』、『聯合知識庫』、『自由新聞網』、『壹蘋果網路』

¹² 哈という漢字は台湾語で「好きでたまらない」という意味で、日本のメディアや消費文化を全面的に取り入れる若者達を指して「哈日族」と呼ぶ。つまり「日本が好きの人たち」という意味である。ただし、「哈日族」には無批判に取り入れるという意味があり、あまり良いニュアンスの言葉ではない。

¹³ 『Chuck』(タイトル訳名: 宅男特務)、『The Big Bang Theory』(タイトル訳名: 宅男行不行) など。

植民地教育を受けた台湾「日本語人」における日本への視点 —日本語による会報誌『友愛』の分析をもとに—

大阪大学言語文化研究科 博士後期課程2年

陳麗華¹⁾

1. はじめに

- ・今日の台湾の言語状況と社会について
- ・1949年から1987年までの戒厳令期間中の言語状況について
- ・本研究の目的：日本の植民地教育を経験した台湾人（「日本語人」）が戒厳令解除後、日本語で書いたエッセイ（会報誌『友愛』より）を分析し、彼らの日本への視点の一端を明らかにする。
- ・本研究の問題提起：①台湾の社会背景が「日本語人」を輩出した原因は何であったのか。
②彼らがその日本語能力を保持してきた理由は何であったのか。
③「日本語人」は自分の人生をどのように受け止めているのか。
④日本語のエッセイを通してどんなことを訴えたかったのか。

2. 背景

1) 台湾における言語政策

- (1) 日本の植民地統治による日本語を国語とする教育政策の時代→同化教育
- (2) 戦後国民党による国語政策（中国語）の時代→「日本色」を払拭。

2) 日本統治前の社会環境

- (1) 地理的な位置付け：清朝管轄下の一省ではあったが、立場的には辺境地域。
- (2) 民族構成：中国大陆からの漢族及び台湾先住民→各自のエスニック言語²⁾と慣習。

3) 日本統治前の教育

- (1) 「書房」：科挙の準備及び上流階級の教養として中国の漢文を伝授する役割。
- (2) 書房における在籍者数：学齢児童数の約5%（1898年データ）（磯田2005）。

3. 研究対象

1) 「日本語人」について

- (1) 青少年期に植民地教育を受けた世代→戦後に日本語の抑圧と中国語の強要を経験。
- (2) 日本語が禁止された戒厳令下には、一部の人は密かに日本語能力を堅持。→「日本語人」³⁾

2) 「日本語人」たちの経歴について

- (1) 彼らの一部は、植民地時代に家庭の方針として帰属のエスニック言語より日本語の常用。
・また、一部の人は家族間では出身のエスニック言語と日本語、公共の場では日本語を。
- (2) 戒厳令下、公には日本語を使わず、家庭内では日本語を用いる。

3) 「日本語人」による研究会 — 「友愛グループ」について⁴⁾

- (1) 「友愛グループ」の設立：1992年に7人の「日本語人」と3人の日本人協賛会員による。
- (2) 設立の動機：

¹⁾ chinleikal983@yahoo.co.jp

²⁾ 漢族のピン南語、客家語及び先住民各部族の諸言語などが帰属するエスニック・グループで使われている。

³⁾ 台湾政府はエスニック・グループ間の緊張を避けるために、近年は各エスニック・グループの人口数とその年齢内訳については公表していない。そのため、現在「日本語人」の人口に関する正確な調査はないが、「日本語人」である黄永伝は『友愛』創刊号(p. 196)に約10数万人生き残っていると記している。台湾内政部のデータによると現在台湾の60代以上の人口は約10%の200万人である。終戦時点で初等教育を受けたことを基準に考えると「日本語人」の年齢は70代以上と考えられる。また、その数から外省人、教育を受けられなかった人々を引けば、黄の説に近いといえる。

⁴⁾ 友愛日本語クラブ会報『つつじ』創刊号(1993)、復刻再版(2007)、p. 5

- ① 正しく日本語を使える人が少ない ② 巷に多く見られる怪奇な日本語看板
- ③ 商品の意味不明な日本語説明 ④ 日本人自身の日本語の乱れ
- (3) 会の主旨:「正しい日本語を」
- (4) 会員数と平均年齢⁵⁾:133名(2008年)。うち台湾人99名。平均年齢73才。
- (5) 会の活動:月例会。参加者90人(平均)。日本語のスピーチ、日本語の勉強。
・会報誌『友愛』1999年より約年1冊(現在8号)、主に日本語のエッセイ。

4. 先行研究

1) 「日本語人」とポストコロニアル文学の関係

ポストコロニアルという概念:『オリエンタリズム』(サイード1978)より確立。→ヨーロッパ植民地主義、とりわけ、帝国主義時代にあった支配が被統治の地域社会にどのような影響をもたらしたか。

- (1) 台湾の場合:日本植民地支配後、戒厳令下での抑圧およびアメリカ資本主義の影響による。
 - これらの要因で独自の台湾文学が形成。
 - ・ 作家たちは戦前「日本人」として、また戦後「中国人」としての強要を体験。
 - 作品の特色:台湾人として抑圧されてきた存在、歴史の主権、および台湾の土着文化
例えば、陳火泉、楊逵、呂赫若、吳濁流などの作品
 - ・ 日本語、中国語、ビン南語、客家語といった言語混交現象の技法による創作物品⁶⁾。
 - 作家は郷土のイメージとナショナル・アイデンティティを追求(陳2003、張2004)。
 - ・ 本研究では文学作家を職業としない、社会の各分野で活躍していた「日本語人」が『友愛』に投稿したエッセイを分析。それは自分史のものが多いため。

2) 「日本語人」についての見方

「日本語人」:『台湾万葉集』の序文に初めて出てくる言葉(黄2003)。

(1) 黄(2003)の見方

- ・ 「日本語人」の特徴:日本語にこだわりをもち、日本文化を身につけた元日本人であった台湾人。
- ・ また、「日本語人」は旧植民地の中では台湾に限定されると指摘するが、説明がない。
- 民族的な歴史背景、日本との地理環境、植民地の開始時期、統治期間における政策的な違い、それに植民地終了後の政策によって、被統治経験者の受け止め方が違う。

(2) 磯田(2005)の見方

- ・ 「日本語人」の特徴:日本語を主たるコミュニケーションの手段として使う台湾人に過ぎず、彼らのもっている台湾人アイデンティティは日本化されていない。
- ・ 一方で、筆者(2007)⁷⁾のインタビュー調査の結果:彼らは人格形成の時期に植民地教育を受けていたが、のちの人生にはそれが役立つ。

5. 会報誌『友愛』についての考察

1) 会報誌『友愛』にみる「日本語人」の特徴

- (1) 投稿者のプロフィール:1922~1934年生。中等教育以上の植民地教育の学歴。
- (2) 「日本語人」が培った日本語能力:幼少期から日本語能力を培ってきた人。
→ 家庭環境に恵まれ、日本人の通う「小学校」⁸⁾に入学するため、日本人同様の日本語能力と学力が求められ、

⁵⁾ 現「友愛グループ」幹事長張文芳の統計より

⁶⁾ 鍾肇政、『怒濤』、前衛出版社、1991年

⁷⁾ 陳麗華、「植民地・台湾で受けた日本語教育という遺産—ある台湾人親子に着目して」、大阪大学言語文化研究科「言語教育談話会」にて口頭発表、2007年11月22日。

厳しい入学試験が行われる。

両親は私と二歳下の弟・哲夫に日本式教育を受けさせる為、台北市… (中略) …に在住の日本人の知人宅に預けられ、日本人の大正幼稚園… (中略) …に通いました。… (中略) …一九三三 (昭和八) 年四月一日に市内の建成小学校を受験したがパスせず、汽車で北投小学校へ通った。(余初雄「私の暮らした台北」pp. 54-55, 『友愛』5号)

→「小学校」、中等教育以上の教育を受けていた人には日本語による表現の基礎を習得。

2) 会報誌『友愛』にみるエッセイの特徴

(1) 自らのアイデンティティへの問いかけ

①祖父は芝山岩の第一回生で、台湾人として真っ先に日本語を習ったのですが、台湾人として自分達の母語である台湾語を忘れないように、家で台湾語を話し、台湾語で漢文の素読を学ばされていました。(柯徳三「母語と外来語」pp. 3-4, 『友愛』8号)

②戦前の台湾の人は日本人として教育され、心の中でも台湾人であるという意識があったとしても、当時の社会環境や生活様式などで、まさに日本化したバイカルチャー台湾人であった。(陳火桐「二つの名前—改姓名の思い出—」p. 194, 『友愛』創刊号)

・植民地期に、学校での日本教育と家庭での暮らしとの狭間におかれた。

→「日本語人」にとっては、アイデンティティに葛藤が生じている。→アイデンティティの揺れ→両方のアイデンティティを受け入れる選択。

(問) 一台湾人だから、日本人より戦争を客観的に見れたというわけじゃなかったんですね。

(答) いやあ、全然。「聖戦」を疑うことはなかった。ふつうの日本人以上に日本人になりきっていたからね(吳正男「信義」p. 33, 『友愛』3号)

・作者は台湾人ではあるが、日本人以上に日本人。→「代表的日本人」のアイデンティティ

(2) 植民地時代における教育体験

・教育熱心な教師により多くの知識が得られると共に、人格的な陶冶に影響

校長先生は、おごそかに「朱君、お前の言うことはよく分った。お前を退学処分にはしない。… (中略) …。教育者の我々が気が付いていなかったことをよくぞ言うてくれた。… (中略) …喧嘩ばかりしないで、もっと受験勉強に身を入れて官立学校に合格出来るように努力しろ。… (中略) …しっかり勉強しろ！」と訓戒。(朱錫堯「恩師との涙の別れ」p. 173, 『友愛』4号)

・学校の問題児であった朱はある事件をきっかけに向上心が芽生え、受験に全力を尽くした。結果的に、希望の学校への進学や就職もできた。戦後、校長先生に朱は次のように述べる。

先生は私を日本国民に育てる事は、終戦でできなくなりましたが、人間としての人格形成教育をしてくださった事を厚く御礼申し上げます。(同上朱)

・植民地教育を通して、知識の習得だけでなく、人生の歩みに大きな恩恵を。

(3) 歴史認識の表出

① 植民地体験について

昭和十年以前は自由思想がまだ残り、… (中略) …日本内地人と台湾本島人は仲良く暮らしていました。… (中略) …大戦が始まると、台湾語は禁止され皇民化運動の実施や日本式の改姓名を強いられて、戦争に協力させるため軍夫にとられ、兵役の義務も実施… (中略) …明治政府は台湾の建設に力を入れました… (中略) …新聞などにも漢文欄があり、台湾在来の風俗習慣も尊重され平和な時代でした。(柯徳三「母語と外来語」第8号)

・植民地時代の初期には、比較的友好の暮らし、戦争によって日本人と台湾人との間に隔たり。

⁸⁾ 台湾領有期間中 (1898~1941 年)、台湾総督府は台湾の現状を考慮し、日本人学童に対する義務教育期間として「小学校」を設置し、日本国内の尋常小学校と同一課程の教育を実施した。それに対して、台湾人児童には「公学校」、原住民児童には「蕃童公学校」を設置し、初等教育を実施した。

② 国民党による圧制

- ・ 戒厳令解除までの台湾社会は中国の歴史や中華文明一辺倒。
- 彼らは自らの体験談やアイデンティティを存在の証のためにエッセイを残す。
- ・ 「軍事法廷に立つて」(楊鴻儒『友愛』6号, pp. 32-47)の著者楊は中華民国の軍人として日本語を生かした任務を活躍していたが、心当たりのない冤罪をこうむり、約7年の刑を科せられた。楊は「日本語人」ではあるが、戦後、国(中華民国)のために尽くし、「中校」⁹⁾まで昇進したが、冤罪により、彼の人生は暗転。
- ・ 「自由中国」をスローガンに掲げていた国民党政府¹⁰⁾が、言論を抑圧し、「日本化」された台湾人に「中華思想」に変える。
- ・ 台湾人としての悲哀はこのような歴史的事実および外来政権による抑圧。

(4) 日本語人としての使命

- ・ 今日、時代の狭間に生き延びた彼らは使いたい言葉で自己の存在をアピール。
- ・ 自らの特技である日本語能力を活かして、若い世代の役に立ちたい。

台湾では英語が重要[ママ]される中で、日本語は長い間継子扱いにされて、日陰でひっそりと生き長らえてきた。・・・(中略)・・・日本語を習いたい、習っている人が、頻繁に日本語が聞ける環境が形成されれば、進歩も早いだろう。これが古希を迎えた日本語族のせめての貢献、大げさに言えば最後のご奉公になれば幸いである。(藤継思「マザー・タングとバイリンガル」p. 76, 『友愛』3号)

6. 結論

- 1) 日本人として、または台湾人としてのアイデンティティに葛藤している「日本語人」は自らのアイデンティティを再確認するために過去を振り返った。歴史の経緯により彼らは二重のアイデンティティに揺れ動き、自らの存在を確かめようとした。二者択一というより、両方のアイデンティティとも有することが『友愛』を通して、この特徴がうかがえる。
- 2) 「日本語人」を輩出した要因、とりわけ、日本語を堅持してきた原因は① 強い青少年期に受けた日本の教育の影響、② 教育熱心な日本人教師に恵まれた、③ 戒厳令下での国民党による抑圧、④ それに対する反骨精神の醸成の4点に集約できる。
- 3) 台湾の歴史に翻弄されてきた「日本語人」は日本人であったことを前向きに受け止めている。戒厳令下に遭遇した理不尽な差別を訴える一方、身についた植民地教育(日本教育)の振興に努力を傾注している。

参考文献

- 磯田一雄 「台湾日本語文芸の「今」を考える」、『大阪経済法科大学アジアフォーラム』(28)、2004年
- 「初期台湾公学校教育文化史的考察—就学率の推移とその背景を中心に—」、『東アジア研究』(40)、2005年
- 黄智慧 「ポストコロニアル都市の悲情—台北の日本語文芸活動について」、橋爪紳也編、『アジア都市文化学の可能性』、清文堂、2003年
- 孤蓬万里編 『台湾万葉集』、集英社、1994年
- サイード, エドワード・W 今沢紀子訳 『オリエンタリズム』上、下、平凡社 1993年
- 陳芳明 『後殖民台湾—文学史論及其周辺』、麦田出版社、2003年
- 張銘芳 「台湾におけるポストコロニアル研究の現状と課題の一考察— 陳芳明によるポストコロニアル研究の展開—」、『立命館産業社会特集』第39巻3号、2003年、pp. 69—86
- 友愛グループ編 『友愛』創刊号～第8号、1999～2007年

⁹⁾ 日本では中佐に相当

¹⁰⁾ 1945年日本の敗戦により、台湾は中華民国の領土となった。1949年に「国共内戦」に敗れた中華民国執政党の国民党政権が軍を率いて、台湾に渡ってきて、2000年まで政権を握っていた。

台湾における日本へ留学する大学院生の自律性を高める会話教育

—アクションリサーチを通じて—

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程2年

林 盈萱

1. 問題発見

台湾教育部の調査によると、2004年から2007年にかけて、日本への留学申請者数は年々増加している。政府の奨励や大学国際化のブームの影響で、台湾の各大学において日本への短期留学や研修プログラムが次々と打ち出されるようになった。台湾の大学側としては、日本留学準備期間の日本語教育は新たな課題となっている。

筆者はこれまで台湾で日本留学支援業務に携わってきたが、多くの留学経験者の証言を通じて、いくつかの問題点が存在することに気付いた。具体的には、一年間の留学期間中、環境や異文化適応に時間を取られ、日本語での意思疎通が思ったより困難で、その結果、日本語レベルは当初の期待ほどの進歩はなく、就職活動の際にも日本短期留学はプラスの経験にならなかったという問題が挙げられる。

筆者が勤務する南台科技大学では、今まで日本語非主専攻の院生のために留学前の日本語補講クラス（週に12コマであり、10コマは日本語能力試験対策の授業で、2コマは会話の授業）を開講してきた。しかしその主な目的は日本語能力試験を合格させることであり、日本語を勉強する時間が限られている学生たちにとっては、必ずしも最適な学習内容を提供しているとは言えない。また、上で述べた日本人とのコミュニケーションの問題を解決する取り組みもなされていないのが現状である。以上で述べた現状に基づき、台湾人日本語非主専攻の院生を対象に、彼らが日本留学中に日本語で十分なコミュニケーションがはかれるよう、「会話能力の向上」および学習者自らが学習目標を立て、学習を調整できる「自律的学習の養成」を軸に、本発表では2008年2月～3月の間に行った日本語会話の授業の経過を報告する。

2. 先行研究：

2.1 学びのドーナツ理論

人間の学びということに対し、佐伯(1995)は「学びのドーナツ論」を取り上げて説明している。(佐伯 1995:66)によると「学び手 (I) が外界 (THEY 世界) の認識を広げ、深めていくときに、必然的に二人称的世界 (YOU 世界) との関わりを経由するとしたもの」と述べている。そして、学び手が何かを学ぶ際、必ず道具 (artifacts) が介入し、その道具を使いこなせるようになった段階で、はじめて学習者にとって「透明」な「YOU 的道具」と関わり、外界 (THEY 世界) へ探求していく。つまり、人の学びを広げてくれるのは、YOU 的な他者（ここでは指導者）と YOU 的道具（教材）との親密な交流であり、それによって、自我が拡張し、変化し、さらにより深く社会・文化に入り込んでいくのである (佐伯 1995:70)。また、「I」と「YOU」の間に第一接面、そして「YOU」と「THEY」の間には第二接面が存在している。第一接面とは指導者の教授や教材そのものが学習者にとって分かりやすく、親しみやすいもの、または「身近な」ものとして捉えることができる側面である。一方、第二接面とは、指導者や教材が切り開いてくれるものが、現実社会の文化と関わりをもってくる側面である (佐伯 1995:74)。佐伯の理論を1で述べた台湾留学

準備教育の問題に取り合わせて考えると、まず第一接面において、これまで学校が提供した留学準備教育は、試験合格というプレッシャーが込められている能力試験対策としての教材、また媒介語による文法中心の指導法である。授業の時間以外に、学習者同士はお互いに交流もなく、むしろ競争的な雰囲気になっている。また、教室の中でインタラクションが少なく、教師から一方的な説明を浴び、模擬テストを繰り返すという抑圧された準備教育である。その状態は「YOU」的な世界とは言いにくい状態といえる。

2.2 研究方法—アクションリサーチ

本研究は現状の改善を最終的な目的としているため、観察型の研究方法とは異なるアクションリサーチが最適だと考える。アクションリサーチは「アクション」と「リサーチ」の結合と捉えられる。横溝(2000:17)はアクションリサーチを「自分の教室内外の問題および関心事について、教師自身が理解を深め実践を改善する目的で実施される、システマティックな調査研究」と定義している。本研究は台湾における教育現場の問題から出発しているため、台湾の教育現場に基づいて修正された張他(2007)が提案した「問題発見」、「問題診断」、「アクション計画」、「データ分析」、「結果評価」という手順でアクションリサーチを行った。

3. フィールドワーカー「問題診断」および「アクション計画」

日本留学を控えた日本語非専攻の院生は基本的日本留学に必要な学習リソースを全く理解しておらず、自ら目標を設定し、どのような学習リソースが入手できるのかについて考えたこともないということが予備調査で分かった。したがって、指導側が留学するための日本語学習リソースへの意識を導く役割を担う必要があると考えた。学習リソースを選ぶ際、市販の教科書では郵便局や入国管理局など公共機関での会話について取り上げるものが殆どだが、これは台湾人にとって必ずしも優先に学びたいものとはいえない。そのため、日本で留学している台湾人留学生が困難を感じている点を明らかにし、その成果を留学準備教育に生かすことに念頭に置いた。

そこで、2007年11月から2008年1月にかけて、日本留学中の32人の台湾人留学生に留学生活において困っていることや悩みについてインタビューを行った。調査結果は、「日本語への不安」、「行動範囲内のコミュニティへの悩み」、「日本人とのインタラクションの不足」、「日本人との付き合いに対する悩み」、「学業や研究に対する悩み」という5つのカテゴリに分類された。

準備教育で取り上げる内容として、今回調査で明らかになった台湾人留学生の困難点をテーマにし、その中に学習ストラテジーを取り入れて提示する形でカリキュラムを作成した。教材に提示する学習ストラテジーに関して、Oxford(1990)で取り上げられた6つの言語学習ストラテジーをベースにしている。¹ その6つのストラテジーとは目標言語の単語や表現を記憶する「記憶ストラテジー」、目標言語を習得するために練習に用いる「認知ストラテジー」、アウトプットする際に制限や不足を補う「補償ストラテジー」、学習状況をモニターし調整する「メタ認知ストラテジー」、不安や緊張などを克服する「情意ストラテジー」、人とのインタラクションを利用した「社

¹ Oxford(1990)で紹介された6つのストラテジーの内容は主に不特定な国の学習者が外国語を学習する際に使うストラテジーであるので、台湾人の日本語学習にすべて適用できるとは限らないと考え、そのほかに、林(2008)で明らかになった台湾人ならではのストラテジーも付け加えた。

会的ストラテジー」から構成される。この他、日本で留学している留学生に留学で必要とする能力は何かについてインタビューしたところ、言語を学習するための6つのストラテジーの他、「情報収集ストラテジー」、「勉強ストラテジー」、「環境作りストラテジー」の使用も需要であることが確認されたため、全部合わせて9つのストラテジーをカリキュラムの中に取り入れ、4名の大学院生を対象に日本へ留学する前の会話授業を行った。

4. 「データ分析」

アクションリサーチの過程を記録するために、以下の5種類のデータを収集した。

- (1) フィールドノート：毎回授業でしてよかったことや失敗したこと、その日の特別な出来事などをノートに記録した。
- (2) 学習シート、学習成果に関する記録：授業の後、学習者にその日の授業で勉強になったことや克服していないこと、自己評価などを学習シートに記入してもらい、それをコピーしてデータの一部として集めた。
- (3) 学習ストラテジー調査（授業実施前と実施後）：Oxford(1990)の学習ストラテジー調査票に台湾人留学生が使ったストラテジーを加えて修正したものを使い、学習者に授業実施前後のストラテジー使用の記録として記入してもらった。
- (4) フォローアップインタビューデータ：授業のアシスタントに実施を依頼した。授業実施一週間後と三週間後にそれぞれ一回ずつ学習者に感想を聞いて、内容をICレコーダーで録音した。
- (5) 学習者と指導者の日本語会話の録音データ（授業実施前と実施後）：学習者の日本語会話能力の変化を記録するために、授業実施前と実施後2回に分けて、（一回目は一人3分で二回目は一人10分）筆者が学習者と日本語で会話した内容を録音した。

5 「結果評価」

① 学習ストラテジーの使用が増加した。

学生が日本語を学習する際に使用する日本語学習ストラテジーを明らかにするため、授業の実施前と実施後にアンケートを行った。調査の結果、学習者2人の「環境作り」と「情報収集」ストラテジーの使用において変化があまり変わらなかったほかは、その他の学習者はすべてのストラテジーの使用頻度において、授業実施後、全員が向上したという結果となった。

② 全員の学習動機が向上した。

授業終了後、会話授業に参加した4名の大学院生が全員授業に対し、アンケートとフォローアップインタビューを通して、この授業に対しての自己評価および学習動機の向上について質問した。全員が日本語学習動機が上がったと述べた。

③ 会話能力が向上した。

授業の実施が学習者の会話能力に変化をもたらしたかどうかを確認するため、授業に参加した4名の学習者と授業に参加していない5名の海外研修生の会話データと比較した。この5名の海外研修生も同じく試験対策中心の準備教育を受けてきた学生であり、4月から日本へ留学する予定である。授業を実施する前および実施後それぞれ一回ずつ筆者が彼らと日本語で会話し、授業を受けた4名の海外研修生の会話データのベースラインデータとして、その内容を録音した。会

話内容を評価する際、「全体的な印象」、「単語」、「意味表明」、「流暢さ」、「会話スキル」という5つの項目を分け、各項目10点で、合計50点という評価表を作り、日本語教師に評価を依頼した。なお、日本語教師には今回の授業を実施した事を伝えていない。授業を受けた4名グループと受けていない5名グループの録音に対して、その日本語教師がつけた点数である。以下の表のとおり、授業をうけたグループは飛躍的な進歩を見せている。

授業を受けたグループ	授業実施前 2008/2/20	授業実施後 2008/3/21	授業を受けていないグループ	2008/2/20	2008/3/21
Aさん	23	34 (+11)	Hさん	15	18 (+3)
Bさん	25	39 (+14)	Iさん	18	23 (+5)
Cさん	21	36 (+15)	Jさん	5	5 (+0)
Dさん	23	34 (+11)	Kさん	6	11 (+5)

5 考察

学習者に変化が起きた結果について、ここで佐伯(1995)の「学びのドーナツ論」を用い、考察を行う。彼の理論にならば、調査対象者を自我としての「I」に、指導者を第二の自我を育てる「YOU」に、そして日本への留学や将来卒業した後、現実として現れてくる社会という外の世界が「THEY」として捉えることができるだろう。1. で示した現在の準備教育と今回のリサーチの異なる点は、指導者が教室では上の存在ではなく、あくまでも学習者たちの学習リソースの一部として学習者との新たな関係づくりに心がけたところである。また授業以外でも、学習者が日本語学習について互いにシェアするようになった。たとえば、授業を受けた後の感想や日本語に関して抱えている困難点などについて語り、お互い励ましの場合まで構築された。まさに教室という壁を乗り越え、「YOU」世界を築き上げるための新たなスタートとなった。そして第二の接面において、実際に留学経験者が使っている学習ストラテジーを紹介するほか、留学生が日本での生活を描いた映像を通じて留学先で必要とされる学習リソースも提示した。それにより、彼らが直面する「日本留学」という「THEY」により一歩近づき、今回のような成果に繋がったのではないかと考えられる。

参考文献

- 佐伯胖(1995)『「学ぶ」ということの意味』岩波書店
- 田中望・斉藤里美(1993)『日本語教育の理論と実際—学習支援システムの開発—』大修館書店
- 横溝紳一郎(2000)『日本語教師のためのアクション・リサーチ』凡人社
- 林盈萱(2008)「留学準備段階の日本語会話教育—学習ストラテジーの側面から—」『2008 応用外語国際学術研討会』台湾高雄国立餐旅学院(2008,5,17)における口頭発表資料
- 林明煌(2007)「大学教師と院生の日本語学習ストラテジーの研究—言語四技能と文法の学習をめぐって—」『台湾応用日語研究』第四期 台湾応用日語学会、pp.79-102
- Oxford, R.L.(1990) *Language learning Strategies: What Every Teacher Should Know*. Newbury House.
- 張徳銳他(2007)『教學行動研究實務手冊與理論介紹』高等教育文化事業有限公司

日本語漢字語彙の意味形成に関する一考察

—台湾人日本語学習者を対象に—

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程 3 年

郭 毓芳 (KUO YU-FANG)¹

1.はじめに

本発表は中国語を母語とする台湾人日本語学習者が、どのように日本語漢字語彙の意味を習得するかを考察するものである。中国語を母語とする日本語学習者は母語の知識を用いながら、日本語の漢字語彙を学習し、使用することが考えられる²。母語の漢字語彙は学習者の日本語学習の助けになる場合もある一方、干渉になる場合もある³。これまでの先行研究は、中国語母語話者はL1の転移により日本語の漢字語彙を習得していると指摘されている。それでは、実際、その習得のプロセス、とりわけ、意味形成のプロセスはどういったものであるか。また、どのような要因が習得に影響しているのか。本発表ではこれら二点について考察したい。

2.先行研究及びその問題点

中国語母語話者はL1の転移により日本語の漢字語彙習得をしていると指摘されている。中国語母語話者を調査対象とした漢字語彙習得に関する研究としては安(1999)、加藤(2005)などが挙げられよう。これらの研究では、母語の転移が習得の要素の一つであることが明らかにされており、また、学習者に日本語の漢字語彙を身に付けさせる方法を提供すべきだとの主張がみられる。しかしながら、実際に学習者がどのような習得のプロセスを歩むのか、どういったメカニズムにより習得が進むのかという点は明らかにされていない。また、茅本(1996, 2000)は認知心理学を応用し、漢字の音韻処理は中国語の音韻処理を利用して行われていること、漢字の形の処理には中国語の漢字の形が利用されていることを主に検討している。

このように、これまでの先行研究は量的研究が中心であり、意味の差異が学習者の日本語漢字語彙の意味処理に影響を与えているか否かは説明されていない。中国語母語話者における日本語漢字語彙の意味形成はどのような要因が影響しているのか、またどのような部分で母語が習得に影響を及ぼしているのか、していないのかという点について質的に検討した研究はまだなされていないのである。

3.研究目的

本発表では、(1)中国語母語話者はどのような知識を基礎にして、日本語の漢字語彙を使用しているのか。(2)中国語の漢字語彙に関する知識は日本語の漢字語彙の使用にどのような影響を与えているのかについて考察する。

4.調査方法

自由連想法を用い、台湾人学習者における日本語漢字語彙の意味形成のプロセスを調査す

¹ kellyfanvision@yahoo.co.jp

² 日本語の漢字語彙の音声、語形、意味、使用法の面において、中国語漢字語彙の知識が利用されている。

³ 漢字の表記を通して、漢字語彙をより早く身につけることができる一方で、中国語漢字語彙の音声、意味、用法の借用により、日本語漢字語彙の習得を妨げる恐れがある。

る。自由連想法は連合心理学をはじめて実験に応用したものであり、被験者に刺激語を与え、連想させるという方法をとる。調査で学習者に日本語漢字語彙を1語ずつ与え、その漢字語彙を使い、自由にフレーズと文を作ってもらう。学習者による日本語漢字語彙の意味形成のプロセスを考察する研究であるため、2ヶ月に一回の頻度で調査を行っている。

4.1 調査対象である漢字語彙

漢字語彙の選定と分類は文化庁(1978)『中国語と対応する漢語』が行った日中両言語の漢字語彙の対比に基づく。文化庁で取り上げられた日本語漢字語彙は、外国人に対する日本語教育の初級・中級レベルでよく出現する漢字音読語である。日本語と中国語それぞれの意味範疇の対応関係に沿って、日本語の漢字語彙を日中同形同義語、日中同形類義語、日中同形異義語、日本語にしか存在しない漢字語彙⁴という4つの類型に分類されている。

4.2 調査協力者

本発表では、1人の調査協力者の調査内容を取り上げ考察する。調査協力者に関する情報は以下のとおりである。

＜表1＞調査協力者に関する情報⁵

名前	フィッシュ
日本語学習歴	3年3ヶ月
日本語能力	日本語能力試験2級に相当 ⁶

4.3 調査結果

調査協力者に自由にフレーズと文を口頭で作ってもらい、2007年12月、2008年2月、2008年4月の3回に渡って、調査を行った。また、自由連想法の後のフォローアップインタビューでは、学習者がどのような知識を用い、句や文を作ったのかを尋ねた。本発表で取り上げた漢字語彙は、調査で使っている漢字語彙の一部であり、「世界」は日中同形同義語に、「意識」は日中同形類義語に、「用心」は日中同形異義語に、「速達」は日本語にしか存在しない漢字語彙に分類されている。また、それぞれの句と文は日本語母語話者にその正誤について判断してもらった。それから、フォローアップインタビューによって、調査協力者は句や文を作ったとき、「日本語の正しいインプット」、「日本語のインプットによる間違い」、「中国語の有効な借用」、「中国語の借用による間違い」、「日本語の正しいインプット及び中国語の有効な借用」、「日本語の正しいインプット及び中国語の借用による間違い」の6つの思考パターンが窺える。

⁴ 中国語では同じ表記を持った漢字が存在しているが、この二つの漢字文字で構成された漢字語彙が存在しない語彙はこの分類に属する。例) 下手。

⁵ 調査協力者の個人の情報を保護するために、名前は仮名で記載する。調査協力者の日本語学習歴は現在2008年6月のことである。

⁶ 平成19年度(2007年12月)日本語能力試験の1級試験を受けたが、不合格であった。調査協力者の日本語能力を測るために、2008年4月末に平成13年度の問題集を解かせたところ、2級合格水準に達した。

5.まとめと考察

以下は6つの思考パターンをa～fに分類して、それぞれのパターンで作られた句と文を考察する。

a.日本語の正しいインプット

- ①世界で一番高い山である。
- ②地球温暖化は世界各国ですごく注目されている議題です。

調査協力者は例①と②を日本語のみ使用して、考えて作ったと答えた。日本語の知識が正しくインプットされて、そのインプットが正しいアウトプットに繋がったことが考えられる。

b.日本語のインプットによる間違い

- ③速達する*
- ④この小包は速達でしてください*

調査協力者によると、例③と例④を考えた時、日本語漢字語彙「速達」の知識を利用したと回答した。調査協力者は日本語漢字語彙の意味を用いて、その内容を作ろうとするにもかかわらず、間違いをしてしまったことがみられた。日本語のインプットの知識は正しくアウトプットされなかったことが例③と④で見られた。

c.中国語の有効な借用

- ⑤世界一周旅行。
- ⑥ある人は交通事故にあって、今意識不明で病院にいます。

「世界」は日本語も中国語も同じ意味を持ち、また、「意識不明」という表現は中国語にもあるため、中国語漢字語彙の知識は正しく借用され、正しいアウトプットに繋がった。例⑤と⑥から母語の語彙知識は学習者にとって、プラスの影響になることが窺える。

d.中国語の借用による間違い

- ⑦自主意識*
- ⑧今度の送別会はすごく用心した*

「自分の意志を持っている」は中国語では「自主意識」で表現することができる。また、「心をこめた」という言い方は中国語では「用心」で表している。調査協力者は中国語漢字語彙の知識を用い、例⑦と⑧を作ったと回答した。しかし、ここはc.パターンと異なり、母語の漢字語彙の知識は学習者にマイナスの影響を与えて、正しくない句と文がアウトプットされたことがみられる。

e.日本語の正しいインプット及び中国語の有効な借用

- ⑨世界平和。

⑩自分で想像した世界。

調査協力者の回答によると、例⑨と⑩を考えて作った時、日本語と中国語の漢字語彙の知識両方とも使ったことが分かった。「世界」は日本語も中国語も同じ意味であるため、両言語の漢字語彙の知識は正しいインプットであり、正しいアウトプットを導いている。

f.日本語の正しいインプット及び中国語の借用による間違い

⑪暖かい世界*

例⑪も日本語と中国語の漢字語彙の知識が使用されている。しかしながら、例⑪は日本語の構造として正しいが、意味は不自然である。調査協力者が例⑪を作った時、日本語の正しいアウトプットは句の構造に影響を与え、中国語の正しくないアウトプットは句の意味にマイナスな影響を与えた可能性がある。

6.おわりに

「5.考察とまとめ」で分かったように、調査協力者はそれぞれの句や文を考えると、日本語の知識、中国語の知識、また日本語と中国語両方の知識を使っていることが分かる。つまり、日本語漢字語彙の意味形成のプロセスにL1のみならず、L2である日本語の知識も影響しているのである。従来の先行研究では、L1による負の転移が中国語学習者の漢字語彙習得に影響を及ぼすことだけが述べられてきたが、L1による正の転移も考慮されるべきではあるまいか。また、日本語漢字語彙の知識が正しく利用されている場合とそうでない場合がともに調査によって明らかになった。今後は学習者におけるL1とL2の漢字知識の利用状況を詳しく考察するうえで、母語知識と目標言語知識の利用は学習時間の変化につれ、どう変化してゆくのかを考察する。

【参考文献】

- 安龍洙 (1999) 「日本語学習者の漢語の意味の習得における母語の影響について—韓国人学習者と中国人学習者を比較して—」『第二言語としての日本語の習得研究』第3号 第2言語習得研究会 pp.5~17
- 加藤稔人 (2005) 「中国語母語話者による日本語の漢語習得—他言語話者との習得過程の違い—」『日本語教育』125号 日本語教育学会 pp.96~105
- 茅本百合子 (1996) 「日本語漢字と中国語漢字の形態的・音韻的差異が中国語母語話者による日本語漢字の読みに及ぼす影響」『広島大学教育学部紀要』第二部第45号 広島大学教育学部 pp.345~352
- _____ (2000) 「日本語を学習する中国語母語話者の漢字の認知—上級者・超上級者の心内辞書における音韻情報処理—」『教育心理学研究』48巻第3号 日本教育心理学会編集 pp.315~322
- 針生悦子 (編) (2006) 『言語心理学』朝倉書店
- 文化庁 (1978) 『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局
- Corder, S.P.1983.A role for the mother tongue. In *Language Transfer in Language Learning*, ed.by Gass, S., and Selinker, L., Rpwley, MA: NewburHouse Publishers, Inc. 18-31

中国系留学生間の会話における日本語コードスイッチング ——言語表現の補足としての機能を中心に——

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程3年

張 巧榛

一、はじめに

1.1 研究の背景

- ・ 日本に留学中の中国語母語（公用語）話者は、二言語併用¹の言語生活を送っている。彼らが母語話者同士で会話する時、日本語を中国語の会話にコードスイッチング（以下CS）して会話を進める場面がしばしば観察されている。
- ・ 中国系留学生が会話中に中国語から日本語へCSする現象は、日本文化を受容していることが言語表現として現れていると考える。
- ・ 本研究は在日中国系留学生を調査対象にし、彼らの中国語会話に見られる日本語のCS現象を考察する。

1.2 先行研究および問題提起

1.2.1 先行研究

① 社会言語学分野：

- ・ Gumperz (1982) バイリンガル社会を対象とした研究を行ない、2言語間のCSにおける個人と個人の間のインターアクションが、互いの意味の推論に関与していると解釈している。
- ・ Nishimura (1997) では、カナダやアメリカの日系2世のバイリンガルコミュニティを研究対象とし、日本語と英語のCSを扱った研究がなされた。

② 第二言語習得の分野：

- ・ 富山(1995)日本語学習者を対象とし、学習者の会話において日本語から母語へCSする現象をコミュニケーション・ストラテジーという視点で考察した。
- ・ 服部(1999)社会言語学および第二言語習得、両分野の視点から、日本語母語話者と非母語話者間の会話中の日本語と英語のCS現象を考察した。
- ・ Faerch and Kasper (1983) 言語学および認知心理学の両分野の視点を利用した研究も行なわれており、CSはコミュニケーションのゴールに達する際に問題になるものを解決するために潜在的に意識されたプランであると示唆した。

→本研究では、Faerch and Kasper の観点から、話者がCSする際にどのような意識が働くのかを考察する。更に、CSが現れることと強く関連する話者の言語使用の意識について観察し、CSが起こった実際の自然会話のデータと合わせて考察を行なう。

1.2.2 問題提起

- ・ 社会言語学分野の先行研究：主に安定したバイリンガル社会の二言語併用問題として考察されてきた。

→成人の言語学習者のものとは別の問題として考える必要がある。本研究では、バイリンガルとは異なる、学習者の日本語へのCSの機能に焦点を当てたい。

- ・ 第二言語習得研究の分野で日本語学習者を対象したCS研究では、言語学習者が言語能力が不足しているときに補償的機能として目標言語から母語へCSするという状況がほとんどである。

→中国系留学生の場合中国語で言語表現の能力が十分であるのに、なぜ仲間と中国語で話す時にわざわざ日本語の語彙や表現を使うのかについて次のように推論してみた。

→CSの機能については、母語である中国語の言語表現を補足するためと考えられる。この場合のCSは、中国と日本の文化ごとの意味含意の差異によるものである。

¹ 言語学者のワインライヒ (Weinreich, 1953) は「二つ以上の言語と文化が接触するところでは二言語併用の問題が常に生じている」(芳賀純(1979)『二言語併用の心理—言語心理学的研究』朝倉書店より再引用)と述べている。在日外国人留学生の場合は日本文化を体験し、そして日本語を機能言語として使用しながら、一方では、同じ母語話者同士と母語での二言語併用の言語生活を行なっている。ゆえに本稿では彼らを日本の二言語併用者として扱った。

1.3 研究目的

- ・日本語のCSは、コミュニケーションにおいて、どのような働きを持つのか、会話中に話者がCSする理由や心理的な側面について、面接調査に基づいた質的な分析を取り入れた。
- ・異文化で異言語を学習することが学習者の言語表現をどのように変化させ、その結果として、どのようなCS現象を引き起こすかという問題を扱う。

1.4 本研究におけるCSの定義²

本研究では、留学生が中国語で会話を行なうときに中国語でも十分に意味伝達できるにもかかわらず日本語に切り替えて表現することをCSと定義する。

二、研究方法

2.1 調査対象

- ・中国語を母語または公用語とし、第二言語として日本語を習得した日本の大学または大学院に在籍している留学生を対象とする。
- ・日本語レベルが中、上級の中国系留学生総計18組30名で、主要な発言者は30名中18名であった。中でも各場面でCSが現れた8名(発言数の頻繁度による選択)の被験者に更にインタビュー調査を行った。

2.2 調査方法

2.2.1 自然会話の録音調査³

- ① 在日中国系留学生の日常の自然会話を録音し日本語のCSが生じた部分を抽出し、文字化を行なう。
- ② CSの機能、行なわれた理由や中国語と日本語の表現上の差異について考察する。
- ③ フォローアップで文字化データを用い、話者の理由や意識⁴を確認する。

2.2.2 インタビュー調査

- ① 自然会話を文字化したものを調査協力者に確認する。
- ② 言語環境および二言語併用の状況、実際に見られたCSについてインタビュー調査⁵を行なう。

三、調査結果の分析と考察

3.1 日本語特有の表現

本研究の日本語特有の表現とは、意味含意あるいは言語表現上の発想の違いが原因で、中国語では表現しにくい部分の補足をする日本語表現のことである。つまり、中国語で表現しにくい言葉の部分のみ日本語へCSすることによって充実した表現に完成させることである。日本と中国の両文化を経験してきた留学生同士が、より具体的に説明するときに、無理に中国語へ翻訳せずにそのまま日本語で話すことである。それには、言葉の概念や与えるイメージの違い、中国語では表現しにくい不可能であったり、漢字の表記に差異のある表現、擬態語・擬音語を使用するCSがある。

「ボケてる」、「うるさい」、「一生懸命」の言葉がCSされた例は、まさに日中両言語の意味含意や概念の差異によるCSであると言える。また、「びびる」という表現は、意味のほかに音の響きでもイメージを伝達するのに効果的であると見られた。これらの実例からみれば、話者は、母語である中国語以外にもう1つの日本語表現を使ってCSすることによって、表現豊かで効果的な意味伝達を実現している。

² ロングマン応用言語学用語辞典(1988)話し手(書き手)が、使用する言語を別の言語あるいは言語変種に変えることであり、コード切り替えは、たとえば会話において、一方がある言語を用い、他方が別の言語で答えるといった場合に起こる。ある言語を話し始めて、話の途中で、あるいは文の途中においてさえ、別の言語に変えてしまうということが起こると定義されている。

³ 自然会話の録音時間は特に制限しない。録音調査の協力を求める時点では、調査協力者に録音するという依頼をしたが、正式に録音調査を行なう事前には録音調査の目的やいつ録音調査が始まるのかを調査協力者には一切知らせなかった。

⁴ 調査協力者には、録音調査を終えた直後に、日本語CSが起こった場合、CSについての意識問題や理由について質問した。

⁵ 主に中国語で質問するが、8名のインフォーマントが質問に答えるとき、どの言語で答えるのかを一切指定しなかったが、自然的に日本語へCSして答える現象がみられた。

一方、今回収集したデータからみると、言語表現の補足としての日本語へのCSのほか、中国語で表現しにくい擬声語・擬態語としてのCSも頻繁に現れていることが分かった。

日本語の擬声語・擬態語の表現は、日本人の生活に密接に関わり、より自然な日本語表現には不可欠な要素となっている。留学生は日本の生活に馴染んでいて、日本人との接触がふえるにつれて日本語の擬声語・擬態語の用法も少しずつ覚えるようになってくる。したがって、中国語で表現しきれない部分を日本語の豊かな擬音語・擬態語を援用し、中国語の会話に日本語の擬声語・擬態語を使ってCSすると思われる。

日本語能力がある一定のレベルに達した留学生の間で生起する日本語のCSは、その意味伝達の言語表現の選択範囲を中国語に限らずに日本語の言語表現の援用も言語表現の一種として存在していると考えられる。このような言葉の補足をする機能は、日本語の中の借用語⁶である外来語の存在と類似点があると言える。同じ言葉を日本語で表すことが可能であっても、外来語を使うとより適切なイメージを伝えられる表現ができる場合、外来語を使うことになるのが予測できる。この視点からみれば、留学生の日本語CSもこのような機能を利用するという意味で使われる場合があると考えられる。

3.2 日本語に見られる定型表現のCS

留学生は成長してから日本語という外国語を学ぶことになった。日本語や日本文化に対する認識も自分の母国文化のアイデンティティーが定着してから始まったこととなるので、彼らは当然日本文化よりも母語である中国語や母国文化のほうに帰属感を持っているはずなのである。そういう意味で言語補足としてのCSは留学生間の場合とバイリンガルの場合とでは違った意味を持っていると考えられる。

文化認知の変容が見られるCSを次にまとめてみた。まず、彼らの間で最も顕著にCSして使用されているのは「いただきます」、「ご馳走様でした」などの日本語の定型表現である。これらの日本語の定型表現はもともと中国系留学生が属している社会背景においては存在しないものもあるため、お互いの言語行動においても当然使用する必要はないはずである。しかしながら、実際のデータでも彼らの言語表現の中にはしばしば母語社会で使う習慣のない日本語の定型表現が見られる。

3.3 CSの意識および要因

留学生が母国文化にない日本語特有の表現を使うことは、文化的な要素を含めた日中言語表現の違いを補足するためのものである。そのようなCSは、留学生が経験や接触により、日本文化を言語表現的に受容した結果とみられた。この言語表現面でみられた受容は、彼らが日本社会に馴染むために身につけた社会言語学的能力が習慣となったものでもある。このような習慣が母語による言語行動で無意識のうちに自文化にない日本的な社会言語行動を援用した表現が現れたのである。そして、同じ中国語話者である留学生の会話においては、このような言語表現が既に定着している新しい文化のルールでもあると言える。

更に留学生がなぜ日本語へCSするのかについての原因は以下の通りである。

表1 「切り替える原因」についての理由

被験者		Y	J	N	T	F	O	W	I
日本語学習開始年齢		18	18	7	19	20	20	23	21
日本語学習歴(月)		57	84	92	122	66	73	104	56
日本滞在期間(月)		57	84	44	60	19	25	104	32
母語/公用語		中・台	台・中	中・台	台・中	中・英	中	中	中・台
日本語に切り替える原因	母語で適当な表現を忘れた	@	@	@	@	@	@	—	@
	思わず出てきた	@	—	@	@	@	@	—	@
	より豊かな表現の為に	@	@	@	@	@	—	@	@
	特別な引用をする時	@	@	—	@	@	@	—	@
	言い易いから	@	@	@	@	@	@	@	—
	母語で適当な表現がない	@	—	@	@	@	@	@	@
	会話する場面/相手による影響	@	@	@	@	@	@	@	@
	一種の言葉の遊び	@	@	—	—	—	—	—	@
	自分の感情を表すのに相応しい	@	—	@	@	@	@	—	@
	曖昧な言い方でごまかす時	@	—	@	@	@	—	—	@

@→Yes —→No

CSの理由について尋ねた結果、話者が意識した上でのCSはコミュニケーションを円滑にする効果があ

⁶借用：一つの言語から取り入れられ、他の言語で用いられている語や句。(ロングマン応用言語学用語辞典 1988)

ると考えており、そのような効果を求めて日本語へCSしたと判明した。一方、話者が全く意識せずに行なったCSは、とっさに言葉が思いつかない時の一時的なものであると考えられる。

また、CSは、話者にとって言語表現がより広く多くなるというプラスの面がある一方、母語だけでは自分の気持ちを表すのに物足りない気持ちになるというマイナスの面もあった。

四、結論

4.1 まとめ

- ・ 録音調査の結果により、中国系留学生の間では、言葉に含まれる意味あるいは言語表現上の違いによる日本語へのCSがみられた。様々な日本語特有の表現としてのCSが表われた中で、一番特徴的なのは日本語の擬声語・擬態語の使用である。インタビュー調査の結果から、日本語の擬声語・擬態語が中国語より豊かであり、的確に気持ちを表せる点が、よく使う理由であることが明らかになった。日本語特有の表現がCSする要因に関しては、インタビュー調査の結果にも示されているように、留学生は互いにCSすることによって、中国語の言語表現で表しにくいものを、より明確に相手に伝えようと試みることが挙げられる。
- ・ 中国系留学生が日本語の定型表現をCSした要因は単なる日中言語表現の差異によるものだけではないと考える。彼らには、本来、これらの定型表現を使うという文化やルールが、もともと存在していないため、日本語の定型表現としてのCSは、言語表現の差異よりも文化的な要素が関わっていると考えられる。インタビュー調査結果により、中国系留学生が同じ留学生との会話において日本語の定型表現を援用していた。これは、個人レベルとしての日本文化の受容が言語表現の面で表われている現象であることが明らかになった。
- ・ 中国系留学生は日本での生活を通して、日本社会に馴染むためには日本の社会言語学的能力の向上が必要とされる。そして、その習慣となった言語行動が、中国系留学生同士で会話する時にも影響し、日本語の定型表現を使用するようになっていく。彼らが日本での日頃の生活経験などで日本の社会言語学的能力を身につけたことにより、互いに使用する結果を招いている。留学生が母国文化でもない言語行動の援用は言語表現に現われたのは、ある意味日本文化を言語表現の面で受容した結果でもある。留学生の間で日本という異文化社会における第二言語や第二文化との接触が、母国文化に属しない新しい文化のルールが生まれるきっかけとなり、彼らの間で暗黙のうちに認知され言語行動として定着してきたものであると思われる。

4.2 今後の課題

今回の調査では、主に録音調査とインタビュー調査から、質的な分析を行なった。今後は留学生の日本語CSの頻度と言語習得度の関係、言語意識とCSの関連についての更なる分析を行ないたい。

参考文献

- 郭 華江主編 (1994)『日中擬声語・擬態語辞典』東方書店
- 金珍淑 (2006)『朝・中・日3言語併用者のコード・スイッチング—日本在住朝鮮族の言語運用に注目して—』、お茶の水女子大学修士論文
- ジャック・リチャーズ、ジョン・プラット、ハイディ・ウェーバー編者(1988)『ロングマン 応用言語学用語辞典』南雲堂
- 富山佳子(1995)「日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジー—OPI資料に基づいた Proficiency レベル別 CS 使用について」大阪外国語大学大学院外国語学研究科 日本語専攻修士学位論文
- 芳賀 純(1979)『二言語併用の心理—言語心理学的研究』朝倉書店
- 服部圭子(1999)「日本語母語話者・非母語話者間の会話における日本語と英語の「コードスイッチング」——談話展開の観点から——」大阪大学大学院言語文化研究科 言語文化専攻修士学位論文
- Blom, J.P. and Gumperz, J. (1972) Social meaning in structure: code-switching in Norway in Gumperz, J. and Hymes, D. (eds.) *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication* New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc.
- Faerch, C. and Kasper, G. (eds.) (1983) *Strategies in Interlanguage Communication* London: Longman.
- Gumperz, J. (1982) *Discourse Strategies* Cambridge: Cambridge University Press. pp. 59-99
- Nishimura, M. (1997) *Japanese/English code-switching: syntax and pragmatics* New York: Peter Lang Publishing Inc.

カナダ・バンクーバーにおける中国系コミュニティの言語使用に関する一考察 —アンケート調査と文献資料の分析から—

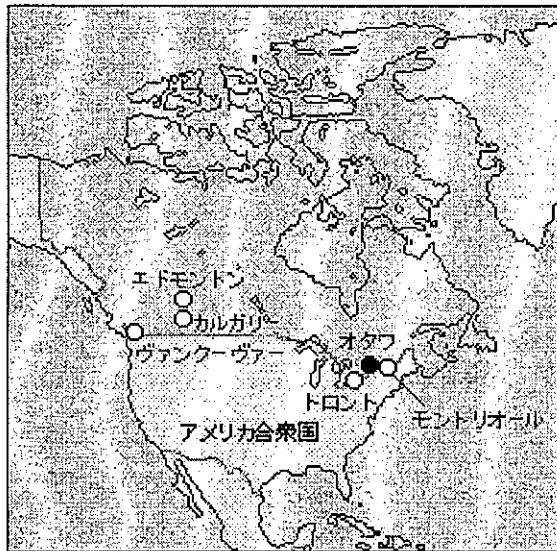
宮崎大学教育文化学部

藤井 久美子

kumikofm@cc.miyazaki-u.ac.jp

1. はじめに

バンクーバー (ヴァンクーヴァー) 大都市圏について



カナダ西海岸ブリティッシュコロンビア州 (州都ビクトリア) にある、バンクーバー市とその周辺地域を合わせた地域 (metropolitan area (CMA))

人口: 約 210 万人 (国内第 3 位)

(バンクーバー市のみだと 58 万人: 国内第 8 位)

面積: 約 2,900km²

(バンクーバー市のみだと約 114 km²)

(地図…外務省・北米・カナダホームページより
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/canada/index.html>)

2. バンクーバーの中国系コミュニティ

○歴史

1858 年 バンクーバー郊外のフレーザー川流域で金鉱が発見され、サンフランシスコにいた中国人が採掘のためにやってくる。(ゴールドラッシュ)

1881 年～85 年 カナダ太平洋鉄道建設のための労働力として中国人が雇用される。

1885 年～ 中国人の移民を制限する方向へ

(職業制限、人頭税による圧迫 → 『中国人移民法』(移民禁止条例(1923 年))

1967 年 移民法改正。ポイント制による移民許可の方向へ。

1972 年 バンクーバー中華文化センター設立。

1973 年 中僑互助会 (S.U.C.C.E.S.S.) が設立され、英語のできない中国系移民に対してサービスを行う。

1988 年 香港からの移民である David Lam 氏が、中国系移民として初めて、ブリティッシュ・コロンビア州の州知事になる。

1980 年代後半以降

中国への返還が決まった香港からの移民が急速に増加。別名「ホンクーバー」と呼ばれる。ニューチャイナタウン (リッチモンド市など) の形成。

○中国系住民の人口 (2006 年センサス)

カナダ最大のチャイナタウンはトロント。バンクーバーは第2位。

	人口	中国系人口	人口比
カナダ	31,241,030 人	1,012,065 人	3%
ブリティッシュ・コロンビア州	4,074,385 人	342,920 人	8%
バンクーバー大都市圏	2,097,960 人	324,840 人	15%
バンクーバー市	578,041 人		28%

3. カナダにおける多文化主義と中国系コミュニティ

1969 年 英語とフランス語が公用語化される。

1971 年 連邦政府が多文化政策を導入し、補助金プログラムを創設。

1977 年 『カナダ人権法』で人種、出自、皮膚の色、宗教、性別による差別を禁止。

1982 年 多文化主義と平等権がカナダ憲法の「権利と自由の章典」で明文化される。

1988 年 連邦レベルで『多文化主義法』が制定される。

〈ブリティッシュ・コロンビア州 (BC 州)〉

○1993 年『BC 州多文化主義法』

第2条：・人種、文化的遺産、宗教、民族性、祖先と出身地の多様性が BC 州と州民の生活を豊かにすることを認めること。

- ・BC 州の多様な文化的伝統を尊重すること
- ・人種間の融和、異文化への理解と尊重、統合された平和な地域社会を推進すること
- ・政治、文化、経済、社会のそれぞれの面で、全州民が自由かつ十分に参加することについて何の障害もない社会をつくること

○多文化省…「実行計画 (Performance Plan)」を発表し、多文化施策の理念、目標、達成のための戦略、評価のための指標を州民に示す

2000 年度の4大目標のうち、移民と関わるもの

- ②移住者の社会的・経済的適応の推進と公平な公的サービスの実現をめざす
- ③移住者のもたらす経済的利益を最大にし、コストを最小にする
- 移住者支援、多文化理解事業を行う NGO に対して補助金を交付する

★S.U.C.C.E.S.S. (United Chinese Community Enrichment Services Society : 中僑互助会

<http://www.successbc.ca/> を参照) もこの補助金交付事業対象となっている NGO のうちの一つ

運営資金：自主財源、連邦補助金、州補助金が各 3 分の 1

運営方法：オールドチャイナタウン (バンクーバー市中心部) に中央オフィスを持つ。設置から 30 年で会員は 2 万人以上。9,100 名のボランティアと 350 名の専従スタッフを擁する。郊外のニューチャイナタウンにもサービスセンターを設置している。

運営内容：就業、修学、移民手続きなど多岐にわたる。

4. アンケート調査について

2003年から2005年にかけてトヨタ財団から受けた研究助成金による研究活動の一環として実施したものである（「日本社会の多言語化—コミュニティ言語の現状と言語政策」助成番号：D03-B1-116 研究代表者 国立民族学博物館・庄司博史教授）。

2004年9月にバンクーバーに赴き、Chinese Cultural Centre of Great Vancouver（中華文化中心）のMr. William W. K. Wooと、中僑互助会（S.U.C.C.E.S.S.）のMs. Connie Mahの助けを得てアンケート調査を行った。対象はオールドチャイナタウンで働く人々である。アンケートでは、中国系コミュニティの言語使用の状況を明らかにし、特に、英語の使用状況を明らかにすることで、S.U.C.C.E.S.S.のような互助組織が、中国系移民の英語習得にどの程度有用なのかを知りたいと考えた。実施方法としては、用紙を上記組織のメンバーに手渡して依頼し、後日回収に赴いた。したがって、回答時の状況は不明であるが、アンケートを中国語（標準中国語の書き言葉）で行ったために、中国語ができない（漢字が読めない）者は回答者からは外れていると考えられる。

結果的に27名からアンケートの回答を得た。アンケート結果からは次のようなことが明らかになる。

- ①バンクーバーでは中国語の中でも広東語が多用されているが、これは香港、広東省の出身者が多いからである。
- ②日常生活でも英語に触れる機会が多いが、コミュニティ内の会話では広東語を用いることが多い。
- ③標準中国語（「國語」「普通話」）はほとんど用いられない。これは意外であったが、理由としては、バンクーバーの中国系コミュニティが広東系の人々によって構成されているからであると考えられる。
- ④今回の調査対象では、英語を学習するのに互助組織が役立ったと考えられる回答は3名だけであった。

5. まとめと今後の課題

- ・中国系住民の中でも、香港系の場合、英語と広東語による生活が出来上がっている。渡加後の特別な英語学習は不要。
- ・S.U.C.C.E.S.S.のような互助組織が、移民集団に対して果たす役割は、言語教育に限らず、多岐にわたっている。→ 今後の課題として、重要視される働きは何か？
- ・新移民（ニューカマー）に対する言語（特に英語・広東語）教育はどのように進められているのか？
- ・S.U.C.C.E.S.S.のような組織は、ニューカマーとオールドカマーを結ぶ働きを果たしているのか？

主要参考文献

- ・陳吳乃妍他（2003）『追求卓越齊建未來 中僑互助會 30 周年紀念』中僑互助會
- ・Poon, Joanne Mei-chu. *A Canadian Community from generation to generation*. Vancouver: Chinese Cultural Centre Museum and Archives, 1998.
- ・Ng, Wing Chung. *The Chinese in Vancouver, 1945-80*. Vancouver: University of British Columbia, 1999

資料 《実施したアンケートの内容》

以下、有關“口”的問題，請在適當的位置打勾。

個人基礎資料

1. 性別 ☐男 ☐女

2. 年齡 _____ 歲

3. 您的出生地

☐溫哥華 ☐加拿大(溫哥華以外) ☐香港
☐新加坡 ☐臺灣 ☐中國大陸 _____ 省

☐ 其他_____ (地名)

4. 您父母的出生地

・父親

☐ 溫哥華 ☐ 加拿大(溫哥華以外) ☐ 香港 ☐ 新加坡

☐ 臺灣 ☐ 中國大陸_____ 省

☐ 其他_____ (地名)

・母親

☐ 溫哥華 ☐ 加拿大(溫哥華以外) ☐ 香港 ☐ 新加坡

☐ 臺灣 ☐ 中國大陸_____ 省

☐ 其他_____ (地名)

5. 您在溫哥華多久時間住?

☐ 半年以下 ☐ 一年以下 ☐ 三年以下

☐ 五年以下 ☐ 十年以下 ☐ 十五年以下

☐ 二十年以下 ☐ 超過二十年

6. 您在加拿大多久時間住?

☐ 半年以下 ☐ 一年以下 ☐ 三年以下

☐ 五年以下 ☐ 十年以下 ☐ 十五年以下

☐ 二十年以下 ☐ 超過二十年

7. 請對下列各語言，做自我評價。(請圈選其中一個數字)

5 相當流利 4 能跟他人溝通 3 能跟他人溝通，但有點困難 2 聽的懂，但不會說 1 完全不會

英語 _____ 5 4 3 2 1

粵語 _____ 5 4 3 2 1

華語(國語) _____ 5 4 3 2 1

閩南語(臺灣話) _____ 5 4 3 2 1

客家語 _____ 5 4 3 2 1

8. 請勾選以下，您常使用的語言并寫出其頻率(%)。

☐ 英語 _____ %

☐ 粵語 _____ %

☐ 華語(國語) _____ %

☐ 閩南語(臺灣話) _____ %

☐ 客家語 _____ %

您的英語生活方面

9. 您在什麼時候開始會說英語? (不會者，可不回答)

☐ 上小學以前 ☐ 小學 ☐ 國中 ☐ 高中

☐ 大學 ☐ 研究院 ☐ 開始工作以後(____ 歲) ☐ 來

溫哥華(加拿大)以後(____ 歲)

10. 您怎麼學會說英語? (不會者，可不回答)

☐ 在家庭(跟父母) ☐ 在學校 ☐ 跟朋友(學校以外)

☐ 在工作單位 ☐ 在課外活動

☐ 在工作單位 ☐ 在民辦課程(____)

☐ 在福利活動(____) ☐ 其他(____)

11. 請就下面問題中所敘述的情境，衡量您使用的情形，然後在適當的“□”內打勾。

(それぞれ、「經常」「有時」「很少/不曾」の中から選択する形式で)

1. 日常聽到英語的頻率為何?

2. 日常聽英語廣播節目或看英語電影、電視節目的頻率為何?

3. 日常使用英語與中國人交談頻率為何?

4. 日常使用英語與外國人溝通頻率為何?

5. 日常上班或上學講英語頻率為何?

6. 日常在公共場合(上班地點或學校除外)講英語的頻率為何?

7. 日常在家裏或其他私人集會場合講英語的頻率為何?

8. 日常閱讀英語的頻率為何?

9. 日常以英文書寫的頻率為何?

您的全般語言生活方面

12. 請就下面問題中所敘述的情境，衡量您使用英語、粵語與華語(國語)的情形，然後在適當的“□”內打勾。下列各問題中，若有不適合您的情形(無此對象者等)，可不作答。

(英語・粵語・華語(國語)について、それぞれ「經常使用」「有時使用」「很少或不曾使用」の中から選択する)

1. 您跟祖父母交談 2. 您跟父母交談

3. 您跟兄弟姐妹交談 4. 您跟配偶交談

5. 您跟子女交談 6. 您跟孫子交談

7. 您跟朋友交談 8. 您跟同學交談

9. 您跟同事交談 10. 您跟鄰居交談

11. 您跟陌生人交談 12. 您跟外國人交談

13. 您跟不同族群人交談 14. 您在宗教活動場合使用

15. 您在家裏使用 16. 您在私人集會場合使用

17. 您在學校或政府機關使用 18. 您在工作場合使用

農耕の起源およびその営みを語る日本神話における女神および男神のイメージ

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程2年

Shchepetunina Marina

1. はじめに

本研究では、『古事記』に記された農耕に関する伝承を『日本書紀』のそれと対照・比較を行い、神話における農耕伝承に登場する女神と男神のイメージ、言い換えれば、それらが果たす役割およびそれらに関連づけられている観念を検討する。

日本の伝統的な文化は農耕を基盤とした。農耕の変化に伴って女性および女神に関わる概念に変化が生じていると認められている。この変化を神話において考察する。

『古事記』において、イザナミノ命の死、天照大御神の稲田を荒らすスサノヲノ命、オオゲツヒメ、大蛇退治およびホヲリノ命・ホデリノ命の話というエピソードは食物獲得・農耕を物語っている。また、『日本書紀』の伝承を視野に入れると、天孫降臨の話も農耕起源の観念に深くかかわりを持つということが判明する。女神は農耕起源神話に登場して食物・食材の起源となり、あるいは巫女の性質を持つことがあり、男神は稲穂そのものを象徴し、また農耕経営の神話において主役を演じるという傾向が見られる。

『日本書紀』の異伝を視野に入れると、日本神話のムスヒの概念からイザナミノ命・オオゲツヒメの神話を経てアマテラスの稲霊的な性質を検討することができ、農耕の発達・社会の発達が進化的に描写されていることが明らかになる。異伝は対立せず、補足的である。記紀の総括的な研究によって地母神の変遷に伴う世界観の変遷を明らかにすることができると考えられる。

農耕起源神話と女神については研究が多くなされているが、男神を視野に入れて、男女を軸としたものはあまり見られない。ここでは農耕の起源および営みに関する日本神話における男女の取り扱われ方について考えてみたい。

研究方法としては、ヴェルナン¹が提言する神話分析への三段アプローチを使用する。そのアプローチとは、第一に、統合関係的、第二に、連合関係的、第三、概念的分析を結合する。

第一に、物語の分析を行い、ストーリーにおける時系列および因果関係を検討する。

第二に、同じストーリーの異伝、および同様な内容のストーリーの分析および比較を行う。『古事記』と『日本書紀』には同じ神話が記されており、また、『日本書紀』の中でも異伝があるので、これらは比較可能である。この比較によって、各神話が展開するホモロジーおよび対照を明白にすることができる。

第三に、神話に見出される概念を神話が編集された時代から始めて縄文時代にまで遡って、それぞれの社会的・文化的コンテクストにのせることによって、神話が反映する男女に関する概念、その概念と社会の発展とのつながりを検討する。

2. 農耕・食物の起源神話

記紀神話における農耕・食物起源に関する概念は、排泄物化生、身体化生、死体化生および穂落の四つが見出される。

2. 1. 排泄物化生

人間にとっての良き物の起源としての排泄物というモチーフは、イザナミノ命の死の話およびオオゲツヒメ型の話に見られる。

イザナミノ命と排泄物化生

イザナミノ命の出来事および性質を神話展開に従って考察すると、次のようになる：

イザナミノ命は大地母神そのもののような女神で、日本の国土の島も、万物の神々および日本人の祖先

¹ Vernant, J.-P., trans. by J. Lloyd, *Myth and society in ancient Greece*, Brighton, 1980

である大部分の神も生んだ。最後に火の神であるカグツチの神を生み、陰部を焼かれて病に伏せついているとき排泄をした。その排泄物からも豊穡な土地と陶器を主宰する土神、灌漑と肥料を主宰する水神、更に食物の女神などが生まれた。自分の排泄物が農耕の神になることによってイザナミノ命は農耕的な性質を現す。ここで、女神と土と土が産むものが密接な関係を持つと考えられていたことが明らかになる。

大地母神と火の繋がりはその話が形成された時代における農耕の本質を詳細化する。大林太良²が指摘したように、火の神と大地母神の性質を持つ神の関係で食物や農産にかかわる神の誕生は焼畑農耕社会に広く伝わっている。イザナミの死の話にはそのような伝説と類似点がある。焼畑農耕において土が火によって焼かれるように、大地母神的な性質を持つ女神は火によって焼かれ、死んでしまう。このことによって女神は土と連想され、受動的な性格を持っていることが明らかになった。農耕・食物の神々が生まれるために女神の身体を犠牲にする伝承を持つ社会において女性は物体化されたと考えられる。

オオゲツヒメノ命と排泄物

オオゲツヒメの話の前半においては食物と排泄物の関連が見られる。

オオゲツヒメは国として生まれ、身体から食物を出し、死後、体に五穀が化生したというように神話が展開する。ウケモチヒメの話は、はじめの神話素を除けば、オオゲツヒメの場合とほぼ同様である。ここでは身体から食物を出すという神話素に注意を払いたい。

オオゲツヒメ（日本書紀の一書第十一においてはウケモチヒメ）はスサノヲノ命（ツクヨミノ尊）に食物を求められて口などから御馳走を取り出す。これは排泄をするかのようにも見える。人間の食物となるあらゆる種類の御馳走を、自分の体から無尽蔵に出すことができる女神の様子が物語られている。女神は御馳走を与え、能動的な性格を持つのである。

2. 2. 身体化生

身体化生の形で農耕起源を語るのは『日本書紀』の一書の第二に記されているワクムスヒの話である。火の神、カグツチは土の神、埴山姫を娶ってワクムスヒを生んだ。「この神の頭の上に蚕と桑と生り、臍の中に五穀生りき」、というように『日本書紀』第二段には「一書曰」として語られている。吉田敦彦が指摘する⁴ように、ワカムスヒは五穀など人間の生活に貴重なもの発生の母神の特質を持った神である。しかし、その神の性別は名前からは不明瞭で、また、話の展開においては男神であるかのように登場する。ここでは性別よりムス力、霊力が強調されている。

「ムスヒ」というのは産む能力を表す単語である。「全ての物はムサれることによって、その存在を与えられる。草木が生え、石や土が存在することも、究極においては、何等かの方法で生産されたものと考えられる。そこに大きな生産力の存在が考えられる。」⁵ムスヒは特に物の生産についての霊力である。

古代人は当初における自然物採取経済にせよ、次の農耕経済にせよすべてこのムスの働きに依存した。火の神と土の神によって生まれたワクムスヒノ神は誕生によって焼畑耕作文化との関連が伝えられているであろう。このムスヒの概念は野生の植物における生産・生育の力を意味することから、人間が栽培する稲などの起源であるという考えに発達したであろうか。

2. 3. 死体化生

死体化生神話はオオゲツヒメの死およびウケモチヒメの死を語るオオゲツヒメ型神話である。

工藤隆⁶が指摘するように、オオゲツヒメの名は大いなる食物の姫という意であり、ウケモチヒメの「ウケ」も食物を意味する。

² 大林太良『稲作の神話』弘文堂、1973

³ 『古事記』の「大八島国の生成」の話においてオオゲツヒメとは阿波の国の別名として記されている。

⁴ 吉田敦彦『不死と性の神話』青土社、2004、140頁

⁵ 肥後和男『神話と歴史の間』大明堂、1976、25頁

⁶ 工藤隆『古事記の起源』中央公論新社、2006、124頁

女神の死体から五穀など農耕物が化生する。化生した物については水田種よりも多く陸田種があげられている。畑耕作との関連は強く見られる。

オオゲツヒメ型神話に見出される食物の起源に関する概念は次のように変遷する：

排泄物化生	→ 死体化生
食物そのもの	→ 栽培するはずの五穀の種

吉田敦彦⁷⁾は、縄文中期の土偶研究の結果に基づいて、オホゲツヒメ型神話は破片にされた女神の身体から人間の生活に必要なものが出てくるというような、縄文中期の大地母神の信仰の受け継ぎだと解釈する。ここでは吉田氏は、神話の終わり、殺された女神から出てくる五穀に注意払う。しかし、エピソード全体におけるオオゲツヒメの性質の変化、女神における能動的な性格から受動的な性格への変化、暴力を受けずにご馳走を与える女神から暴力の結果に食物を与える女神への変化を考慮すると、このエピソードは、採集・狩猟文化から農耕文化への過渡期を描写していると考えられる。

2. 4. 穂落

大林太良は穂落モチーフと天孫降臨の神話における類似を指摘する。

天から降ること

主神の名前：

天降りをしようとする神、マサカツアカツカチハヤヒアメノオシホミミノ命の名前に入る「オシホ」（「忍穂」）は多し穂で豊かに稔った稲穂の意見である⁸⁾。また、実際に天降りをする神、ホノニギノ命の名前は「穂の饒々」の意であり、稲穂が豊かにみのることに因んだ。⁹⁾

さらに、その仮説の根拠になりうる要素：

- ✓ 『日本書紀』の一書においてアマテラスはニギに勅を謂う際「この豊葦原水穂国」というふうに葦原中国に言及する。それによって、水稻耕作民文化とのつながりが強調されている。
- ✓ 『日本書紀』の一書第一において、ニギノ命が降臨する際、途中にある岐神のことを調べることは女神のアメノウズメノ命に委任された。その時、アメノウズメは「其の胸乳を露にかきいでて、裳帯を臍の下に抑れて」¹⁰⁾事情を聞く。農耕民文化において田を種またくする前、女は裸で踊る習慣が散見する¹¹⁾。この枠組みにおいてエピソードの意味が明白になり、穂落モチーフを強調する。
- ✓ 『日本書紀』一書においてアマテラスがニギに稲穂を挙げること。

天孫降臨の話において政治的なモチーフならびに水稻耕作に関わりを強く持つ稲穂落モチーフは明白である。降りる稲霊として男神であると考えられていた。

- 日本神話全体の連合関係レベルにおいては良き物起源は次のような変換をみせる：国土そのものを生みだす女神（イザナミ） → 国土そのもの（国）である女神（オオゲツヒメ・ウケモチヒメ） → 稲穂を象徴する男神（ホノニギノ尊）という概念の発達が見られる。

3. 農耕の営みの神話

スサノヲが天の田を荒らす

この話は天照における水稻耕作神の性質を物語っている。このエピソードでは、上位の神である天照が田を営み、新穀に関する祭りで主役を演じる。すなわち、農耕の神として能動的な性格を見せる。このエピソードでは、天照大御神は土や食物と同一視されておらず、能動的・巫女的性質を見せる。

大蛇退治

⁷⁾ 吉田敦彦『不死と性の神話』青土社、2004、140頁

⁸⁾ 『古事記』（倉野健司校注）岩波書店、2007、37頁

⁹⁾ 同書、72頁

¹⁰⁾ 『日本書紀』（一）（坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注）岩波書店、2008、134頁

¹¹⁾ Mircea Eliade, *Patterns in comparative religion*, University of Nebraska Press, 1996

この話の場面はすべての異伝において河であり、クシナダヒメ（櫛稲田比売）の名前は「稲田」と意味し、そのことから、川が洪水となり田を覆うかのように、年ごとに水の神霊であるヤマタノオロチは稲田の女神を食べに来る。肥後¹²が指摘するように、中央社会では早く農耕が発達し、それにつれて水神信仰が盛んになり、その象形として蛇神が祭られた。

営みより、田の所属が問題になりうる。田は男神のものであるべきということが伝わっていると解釈できる。

女神は田そのもの、すなわち土と連想付けられ、男神であるヤマタノオロチに捧げられる犠牲である。彼女を救うのは男神のスサノヲノ命である。女神は農耕的な神としても、花嫁としても物体化されている。

ホヲリノ命とホデリノ命

主役の神：

古事記： ホオリノ命、別名はアマツヒコヒコホホデミノ命（天津日高日子穗德手見命）

日本書紀（エピソードのある異伝のすべて）： ヒコホホデミノ尊（彦火火出見尊）

「ホホ」は稲穂を意味する。

ホヲリノ命は、兄が高い土地で田を作ると、低い土地で田を作り、兄の田に水が届かないようにした。兄が低い土地で田を作ると、それを洪水にさせ破壊したりしていた。海神の娘と結婚したホデリノ命は田と水を支配できるようになった。ここで農耕と水の密接な関係が語られている。また、日本書紀の一書の第三にも、田の話が出る。

- 天の田の話を除けば、営みの話しにおいて男に主役が与えられていて、田は男性のものであるべきという概念。

4. 結び

国土を生む女神 → 国土そのものである女神 → 田を象徴する女神

農耕する人間を象徴する男神 → 稲穂を象徴する男神

自然を支配する力の象徴として男性イメージが選ばれ、女性に対する優位性が語られる

女神が土と連想付けられている。女神を主題とした話（イザナミノ命の死、オオゲツヒメの死）においては、女神は大地母神的な性質を持ち、能動的なものから受動的な物体への変化を見せる。この二つの話は採集・狩猟社会から農耕社会への移行を物語るものと解釈される。

他の農耕の話（天の田を荒らすスサノヲ、オロチ退治およびホヲリノ命・ホデリノ命）は稲作経営を語り、稲作農耕時代に属する。それらにおいて（天照大御神の稲田を荒らすスサノヲノ命の話は異類）、男神は能動的に農耕を営む人間や稲穂と連想付けられ、女神は受動的であり、土・田に連想付けられている。

参考文献

Mircea Eliade, *Patterns in comparative religion*, University of Nebraska Press, 1996

Vernant, J.-P., trans. by J. Lloyd, *Myth and society in ancient Greece*, Brighton, 1980

『古事記』（倉野健司校注）岩波書店、2007

『日本書紀』（一）（坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注）岩波書店、2008

伊藤清司・大林太良編『国生み神話・高天原神話』『日本神話研究』2 学生社 1977

大林太良『稲作の神話』弘文堂、1973

大林太良『日本神話の構造』弘文堂、1975

工藤隆『古事記の起源』中央公論新社、2006

肥後和男『神話と歴史の間』大明堂、1976

吉田敦彦『不死と性の神話』青土社、2004

¹² 肥後和男『神話と歴史の間』大明堂、1976、137頁。

日本語虚構テキストにおける重なりと移動

上田恭寿

1. 目的

主に北原亜以子作品テキストを取り上げ、日本語虚構テキストに3様（①主体、②統語上の機能、そして、③場面）の重なりと移動という現象が観察されることを示す。

2. 主体の重なりと移動

2. 1 2つの世界を超えるテキスト

(1) 北原テキストー1

1)窓の障子が淡い橙色に染まった。陽の色だった。ここ一月近く江戸の空をおおって動こうとしなかった雲に、裂け目ができたようだった。

2)お登世が銚子を持ったところだったが、森口慶次郎は、猪口を置いて窓を開けた。3)降りつづいた雨に蓮の根もとの泥が浮き上がって、不忍池の水は薄鼠色に汚れている。その水が、雲の裂け目から一直線に注いでくる陽の光をうけて、ひさしぶりに光っていた。

4)「まあ、お陽様」

5)お登世も最良の客がひさしぶりにたずねてきたような声をあげ、銚子を置いて廊下へ出て行った。6)女中達を呼んで、梅雨寒のために、閉めることの多かった障子や唐紙を開けるように言っている。7)かわりに、慶次郎が所望した熱い茶の湯呑みを盆にのせて、女中のおすみが入ってきた。

8)八つの鐘が鳴ったのは四半刻も前のことで、仁王門前町の料理屋、花ごろもで今頃まで酒を飲んでいるのは、慶次郎だけだろう。

9)「それが、ほかにもいなさるんですよ」

とおすみと言った。

(北原亜以子、『やさしい男』『理屈』の冒頭)

8)と9)の間は2つの世界を超えて、語り手とおすみとの間で会話が行われているかのようである。8)と9)の間に慶次郎の発話が省略されているようにも見える。

(2) 北原テキストー2

1)男は、倉地屋直右衛門となつた。2)倉地屋という屋号に、かすかな記憶があった。3)同じ屋号の店がほかにあるかもしれないが、慶次郎が覚えているのは、十年ほど昔、日本橋小網町にあった千鯛問屋だった。

4)「お恥ずかしゅうございます。その倉地屋でございます」

5)男、直右衛門は、そう言って頭を下げた。(北原亜以子、『やさしい男』、『悔い物語』)

この下線部の4)でも、聞き手（読者）は、3)の語り手の発話に対して、作中人物、倉地屋直右衛門が行う返答を語り手と共に直接聞くような錯覚を覚える。次のテキストでは、2つの世界を超えた対話が行われているかのように見えるが、ここでは省略というより、むしろ兼務。

(3) 宮部テキスト

ペンを握ったまま、本間は目だけ動かして和也を見あげた。

「親に反対されてた？」

和也はのろのろとうなずいた。

「君の両親かな？それとも先方の」

「僕の方です。彰子はまるっきりの天涯孤独ですから」

「ほう……」

二十八歳という若さで、それは珍しい。

「もともと、一人娘なんです。それが、小学校のときにお父さんを亡くして。病気だったらしいんですが、思い出すのが辛いのか、詳しい話はしてくれなかったことがあります。お母さんの方は二年ほど前に亡くなっています」
(宮部みゆき、『火車』)

下線部はかぎ括弧がなく、聞き手に対する語り手の発話を指示するが、「ほう……」からの続きで、本間の発話である印象も与える。逆から見ると、かぎ括弧がないことは、語り手が本間と和也の間の会話に参加、聞き手よりも和也に話しかけているかに見える。下線部は本間と語り手の発話を兼ねる。3つのテキストはいかなるメカニズムによるのか。

2. 2 発話主体の一句中での重なりと移動

次は上記の現象に関連しているのではないか。発話主体が一文の途中で重なり移動している。

(4) 藤沢テキスト

主人公のおもんが元の夫の「辰蔵」に会って、新しい嫁をもらおうという話を聞かされ、街を歩きながら葛藤する様子が描かれている場面。7)と9)では、発話口調や前からの続き具合、あるいは漢字と仮名の使い方から、語り手とおもんの発話が重なりながら移動していると判断される。

1)歩いているうちに、おもんの眼に涙がにじんできた。

2)——あ、うすらバカ。

3)胸の中で、辰蔵を罵った。4)なにも新しい嫁をもらうからと、ことわりを言うことはないじゃないか。5)どいつもこいつも、あたしをバカにしやがって。

6)おもんは興奮して、人をかきわけるようにして道をいそいだ。7)しかし辰蔵は、嫁をもらう前に、もう一度あたしの気持ちをたしかめたいと思ったのかも知れない、と気づいたのは、橋を渡り切って、米沢町の町並みに入ってからだった。

8)だが、そう気づいても、それは何の慰めにもならなかった。9)気持ちをたしかめるといったって、たとえばそのうちもどりたいと思っているなどと言え、辰蔵は卒倒もしかねない男なのだ。

(藤沢周平、『遅いしあわせ』)

2. 3 思考主体または発話主体の重なりによる省略と兼務

省略または兼務に観察された、2. 1は思考主体、または発話主体の重なりによるのではないか。

(3)のテキスト 連続性の仕掛けにより、下線部は、語り手の発話に本間の発話が重なり、その結果、逆に語り手が本間と和也との会話に参加しているかに見える。さかのぼって「ほう……」にも語り手の発話の重なりが見出し得る。

(1)のテキスト 8)の発話主体は語り手。思考主体は、「慶次郎」とあるので、語り手の思考に見えるが(①)、「と慶次郎は思った」とすることができ(②)、また、「と慶次郎は言った」とすることもできる(③) = 語り手の思考と発話(①)以外に慶次郎の思考や発話(②、③)の重なる可能性 ⇒ 9)は、③の「と慶次郎は言った」に対する応答、または、9)が③そのものに対する返答ではなくとも、少なくとも、慶次郎の思考の重なりが8)に読み取られるから(②もしくは③)、9)のおすみの返答が呼び出されるなにかの発話を語り手は想像(創造)できる。あるいは、冒頭からそれまで、多くのテキストに語り手と慶次郎の思考の重なる可能性が見出し得、冒頭から語り手と慶次郎の思考は付かず離れず、両者が一体している様相を呈するが、その流れのなかで、9)のおすみの発話を呼び出す慶次郎の発話が想像(創造)され得る。

(2)のテキスト (1)と同様。(2)の3は(1)の8)ほど、「と慶次郎は思った」、「と慶次郎は言った」が顕在的ではないため、主体の重なりが薄く見え、その分、3)と4)の間のつながりは幾分、唐突

で、隔たりが大きい印象を与えるが、3)にも慶次郎の思考と発話が重なるから、3)と4)の間は無理がなくつながり得る。

⇒ 主体の重なりと移動は世界を超える対話ももたらす。

3. 統語上の機能の重なりと移動—接続構文

(5)『源氏物語』テキスト

いと苦しげにたゆげなれば かくながら ともかくもあらむを 御覧じ果てむとおぼしめすに
今日始むべきいのりども さるべき人びと承れる 今宵より と聞こえ急がせば わりなく思
ほしながら…… (『源氏物語』、「桐壺」)

(更衣が) まことに苦しうでいかにも大儀らしいので、帝はいつそのままで、どうなるにしてもなりゆきをお見届けになりたいとおぼしめすが、「今日からはじめることになっております数々の祈禱を、しかるべき験者の人々が仰せつかっております、それを、今晚から始めますので」と、せき立て申しあげるので、帝はたまらないお気持ちながら、……

「さるべき人びと承れる」は統語上、2つの機能を兼ねる(主格から目的格へ重なりながら移動)。小松(2003)が挙げたテキスト例であるが、彼は「接続構文」による1タイプとする。

ただし、一文中での統語上の機能の重なりと移動は古典仮名文学テキストに多く見られるが、現代書記テキストである現代小説テキストには見出され難い。

接続構文

和文の文体は〈語りかけ〉を基調としている。その文章は、句節をつぎつぎと付け加えていく形をとって構成されており、各句節間の相互関係は、つねに必ずしも緊密でない。構文の基本原理は〈付かず離れず〉である。その特性は、発達の母胎となった和歌からの継承であり、また、口語言語とも共通している。このような特性を持った構文を《接続構文》と命名する。その対極は《拘束構文》である。(同、232)

4. 「接続」としての主体の重なりと移動

1) (4)は「主体の接続」による構文とも言える。実際、(5)に認められるテキストタイプの移動(地の文→会話文)を小松は接続構文の1タイプとする。テキストタイプの移動(地の文→会話文)は主体の移動(「語り手の思考と発話」→「作中人物の思考と発話」)である。

2) (1)－(3)は、テキストの流れのなかでの複数の文の間の接続＝一文中の「接続構文」というより「テキストの接続」((1)では、8)の部分だけではなく、それまでずっと語り手と慶次郎の思考が付かず離れずに一体、そのテキストの流れに従って、不自然さを伴わずに9)が現れ得たと見ることも可能) ⇒ 現代書記テキストである北原テキストにおいてもテキストの接続は積極的に取り入れられている。次の場面の重なりと移動も「テキストの接続」と見ることができる。

5. 場面の重なりと移動

(6)北原テキスト—3

1)左七の機嫌がわるくなるのももっともで、しばらく外出すまいと思っていたのだが、つい先刻、よろづ屋へ鼻紙を買いに行く途中で弓町の太兵衛に出会った。2)京橋界限で押込みを働いた男が谷中にひそんでいると聞き、探索にきたのだという。

3)「ま、あんまりあてにはならねえ知らせだとわかつちやいたんですがね、念のためにと思いやして」

4)案の定、嘘っぱちだったと太兵衛は苦笑して、あらためて慶次郎を見た。5)ほっとした表情になったように見えた。

6)「旦那、ご存じでやすか。辰吉親分とこの…」

- 7)太兵衛はちょっと口ごもって、「おかみさん」という言葉を選んだ。
- 8)「ひょっとすると、おめでたかもしれやせんよ」
- 9)知らなかった。10)八丁堀を訪れた時に晃之助にも会ったが、彼も辰吉の女房、おぶんに
ついて何も言わなかった。
- 11)「晃之助旦那もご存じないんじゃないありませんか。いや、ことによると辰つあんも知らねえ
かもしれねえ」
- 12)昨日もその押込みの探索のため、太兵衛は天王町へ行った。ごく近頃天王町へ引っ越し
てきた男がいるという知らせがあったのだった。辰吉につきあってもらい、その男のようすを
八百屋へ尋ねに行っただが、八百屋の女房は、それどころではないだろうと言いたげな口調
でおぶんの軀のことを話してくれた。辰吉が席をはずした間のことだった。
- 13)「おかみさん、中条流へ行くつもりでやすよ」
- 14)子墮ろしをひきうける医者へ行くつもりだというのである。
- 15)「八百屋の女房は、おぶん——いえ、おかみさんから、決して誰にも言ってくれるなと頼
まれているので、辰つあんには内緒にしておくれと言うんですが、こんなことを、あつし一人
の胸にしまっておけるわけがねえ。ゆうべ、どうしたものだろうと、うちの女房に相談しやし
たよ。が、女房の頭じゃ、ろくな知恵が出てこねえ」
- 16)旦那に会えてよかったと、太兵衛は、肩の荷がおりたような顔をした。17)すべてを慶次
郎にまかせたつもりになったのだろう。が、さずかりものだからとおぶんを説得する以外、慶
次郎にもよい知恵は浮かんでこない。18)ともかくもおぶんに会ってみようと思ったのだった。
- (北原亜以子、『やさしい男』、「三姉妹」)

3つの場面 (①「つい先刻」と発話する、「太兵衛に出会った」あとの場面、②「つい先刻」「太兵衛
に出会った」ときの場面、③「昨日」、太兵衛が天王町に行ったときの場面)があり、基底となる①の場
面で、太兵衛に出会ったときの②の場面が振り返えられ、そして、②の場面で、③の場面を振り返る入
れ子構造。場面は①から②、②から①へと推移する。

- 1) 1)と2)は①の場面。そして、9)と10)は8)の発話に即応する、②の場面での発話の様相が高
い。その間は、2つの場面のしきりが明確でなく、徐々に2つの場面が重なりながら①から
②に移動（「昨日」とある12)は②の場面での発話が決定的）。
 - 2) 13)から15)はそのまま②の場面に属する様相が高いが、16)/17)と進むに連れて場面は①に
戻りつつあるかのようで、18)では、語り手は①の場面から、②の場面を振り返って述べて
いるように思われる。そして、慶次郎はおぶんに会いに行く。
- ⇒ そして、2つの場面の間のしきりは曖昧で、2つの場面は重なりながら移動

6. 結論

- 1) 日本語虚構テキストにの「重なり特性」とそれによる「接続」というテキスト制作
- 2) 現代書記テキストである現代小説テキストで主体と場面の重なりと移動（接続）は積極的

7. 課題

- 1) 3つの要素以外の「重なり特性」とそれによる「接続」の調査
- 2) 絵画等の、他の日本文化における「重なり特性」と「接続」の検証
- 3) 他言語、たとえば英語における「重なり特性」と「接続」の検証

主要参考文献

- 上田恭寿 (2006) 「日本語小説における描出表現テキストの描出位置」『表現研究』第83
号
小松英雄 (2003) 『仮名文の構文原理【増補版】』、笠間書院

マンガのオノマトペ表現にみる造語のパターン — 認知言語学的観点から —

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程3年
井上 加寿子¹

1. はじめに

一般に、オノマトペ（擬音（声）語・擬態語）²は創造性が豊かなことがその大きな特徴の一つとされている（箕 1993a, 1993b, 荻阪 1999, 田守 2002, 飯島 2004 など）。しかし、オノマトペに関する従来の研究では、辞書に掲載されるような一般に認知度の高い表現を取り扱うものが大部分であり、こうしたオノマトペ語彙の生成的側面については研究が希薄であった。

また、このような豊かな創造性によって創作された新奇のオノマトペ表現を扱う研究では、文学作品や近現代詩を扱ったものがこれまで主であった。しかしながら、「日本の戦後マンガは、戦前の『のらくろ』などのマンガと比べると、手塚治虫以来、圧倒的にオノマトペなどを手書きで入れる頻度が高く、それが特徴になっています。」

（夏目 1997: 113）と主張されるように、オノマトペ表現が観察されやすいテキストジャンルの一つとしてマンガは大きな位置を占めている。特にオノマトペ表現の生成的側面に着目する場合、マンガに現れる新奇のオノマトペ表現は文学作品等に現れる比ではなく、新造語形の宝庫といえる。

そこで、本稿では、マンガのオノマトペに見られる新造表現を観察することで、新奇の表現形が創り出される際の言語化の傾向を整理する。

2. 本研究の背景

2.1 オノマトペ語彙の創造性

オノマトペ語彙の創造性について、箕（1993a, 1993b）は、オノマトペの語彙化の程度に引用性・語形変化などの基準から4つの段階があることについて述べ、その場限りの形で用いられる新奇のオノマトペ表現を「臨時形（nonce formation）」と呼び、一つの独立した分類をあてている。また、飯島（2004）では、副詞オノマトペについて、「人それぞれがそのときどきに受けた直感的印象を、音声で模写したもの」を「第一段階／個別的模写」とし、そこから社会的承認が与えられ、定型化した「第二段階／オノマトペ」へと変成してゆくものであるとした（飯島 2004: 31-33）。田守（2002: 108-132）においても同様に、こうした臨時のオノマトペに関する記述が見られる。

また、実験心理学の分野では、荻阪（1999）が、コンピュータで五十音すべてのランダムな組

み合わせにより重畳語をつくった場合を例に、そうした組み合わせが何らかの擬音・擬態語的なイメージを喚起することについてふれている。そして、「任意の2音節の重畳語がなんらかの擬音・擬態語的表現を形成できるということは、擬音語・擬態語の感性情報表現における造語能力がかなり高いことを示唆している」（荻阪 1999: 20-21）とした。

2.2 新造オノマトペに関する研究

こうした豊かな創造性によって創作された新奇のオノマトペ表現に関する先行研究には、宮沢賢治の詩歌のオノマトペを網羅的に調査し、全1120例をデータベース化した滝浦（1996）の研究や、同じく宮沢賢治の小説に用いられる新造オノマトペの造語パターンをまとめた田守（2002, 2004）などがある。また、井上（2007a）では、滝浦（1996）のオノマトペデータベースのうち特に新造形のみを対象としてとりあげ、新造語形の音韻・形態的特徴を、Bybee（1988, 2001）などに代表される「頻度の効果（frequency effect）」の観点から論じた。さらに、井上（2007b）では、主に現代詩より新造オノマトペの用例を収集し、SD法（semantic differential method）と呼ばれる実験心理学的手法を用いた調査により、被験者がオノマトペの新造語に関しても既存語とほぼ同様の音象徴性を得ることが明らかとなった。

2.3 マンガのオノマトペ

マンガに用いられるオノマトペ表現を扱った先行研究では、音韻構造について論じた那須（2004）が挙げられる。那須は、18作品の漫画を検索対象として、部分反復形のオノマトペを393例（うち既存語113例、新造語280例）収集し、Hamano（1998）の研究との比較から新造オノマトペと既存オノマトペの音韻構造上の相違点を指摘した。これにより、新造語幹のC1に現れる音素の中では、「ゴポポポ/gopopopo/」「バチチ/batiti/」「ズドドド/zudododo/」など、特に/g, b, z, d, k/の音素がこの順で突出して多いことが明らかになった。また、夏目（1997）では、マンガ表現を豊かにするオノマトペの効果について言及している。その他、木下（2004）では、マンガに用いられる英語のオノマトペ表現を日本語との比較から整理し、詳細な意味の記述を試みている。

3. オノマトペ表現の造語パターン

3.1 先行研究

井上 (2007b) では、主に現代詩を対象にオノマトペ表現の実際の用例を収集し、滝浦 (1996)、田守 (2002) の先行研究に基づいて(1)のように新造オノマトペを下位分類した。

(1) 新造オノマトペの分類 (井上 2007b: 47 より一部改)

- 一般語彙をもとにしたもの
(例) 粒→つぶつぶ、ぶち (斑) →ぶちぶち
- 既存オノマトペを組み合わせたもの
(例) あはは+かかか→あかかあかか、
ぐしゃ+がしゅん→がしゅん
- 既存オノマトペの語幹から形態を派生させたもの
(例) どくどく→どくどくどく、とろとろ→とろろ、
ごぼごぼ→ごぼんごぼん
- 既存オノマトペの音韻に変更を加えたもの
(例) ばしゃばしゃ→ぼしゃぼしゃ、
ごぼごぼ→ごぼごぼ
- まったくの新造形
(例) ごっしんふう、ろいくいちつぶきゅりりり

3.2 マンガの新造オノマトペ

今回圧倒的に多く観察されたのは、既存のオノマトペ表現の語幹から形態を派生させたと見られるものの中でも、(2)のような反復形であった。

(2) 語幹の反復 (cf. 田守 2002, (1c))

- CV 反復
ババババババ (雷句誠『金色のガッシュ!!』)
キキキキキキ (一条ゆかり『有閑倶楽部』)
- CVCV 反復
べたべたべたべた (高橋留美子『めぞん一刻』)
ぶつぶつぶつぶつぶ (はるき悦巳『じゃりん子チエ』)
くどくどくどくどくどくどくどく (高橋留美子『めぞん一刻』)
ザワザワザワザワザワザワザワ (日渡早紀『ぼくの地球を守って』)

また、那須 (2004) において対象とされた部分反復形もマンガには多く観察された。そして、子音の部分反復のみならず、語幹に含まれる母音の反復形や、語末に付加された撥音の反復形などの新奇の表現も複数見られた。これは、反復や撥音のもつ音象徴性(sound symbolism)³⁾の効果を作者が意図し効果的に創り出された新奇の用例であるととらえられる。

(3) 部分反復形 (cf. 那須 2004, (1c))

- CVCV+CV
チュルル (作: 雁屋哲, 画: 花咲アキラ『美味しんぼ』)
ドロドロロ (手塚治虫『百物語 (第二部 恐山編)』)
ジャラララ (松本零士『銀河鉄道 999』)
ズガガガガガ (魔夜峰夫『パタリロ!』)
ゴボボボボボ (松本零士『銀河鉄道 999』)

b. 母音の反復(CVCVV)

- | | | |
|--------|-------|------------------|
| ザア | <ザー | (藤田和日郎『うしおととら』) |
| キイ | <キー | (魔夜峰夫『パタリロ!』) |
| ジャアアアア | <ジャー | (藤田和日郎『うしおととら』) |
| ピイイイイ | <ピー | (藤田和日郎『うしおととら』) |
| コオオオオオ | <コー | (藤田和日郎『うしおととら』) |
| バキイイ | <バキーン | (藤田和日郎『うしおととら』) |
| キイイイ | <キーン | (松本零士『銀河鉄道 999』) |
| むうーっ | <むーっ | (魔夜峰夫『パタリロ!』) |
| ぶすう | <ぶすー | (一条ゆかり『有閑倶楽部』) |
| にやあ | <にやー | (藤田和日郎『うしおととら』) |

c. 撥音の反復(CVCVNN)

- | | | |
|------|---|------------------|
| ウィー | ン | (松本零士『銀河鉄道 999』) |
| ギコー | ン | (松本零士『銀河鉄道 999』) |
| ヒュー | ン | (松本零士『銀河鉄道 999』) |
| グアアア | ン | (手塚治虫『荒野の七ひき』) |
| ギュイー | ン | (松本零士『銀河鉄道 999』) |

また、一般に、1 モーラだけからなるオノマトペは現代日本語においてはきわめて稀で、促音や撥音が伴うのが通常とされてきたが (Waida 1984: 57, 田守・スコウラップ 1999: 20)、一般的なオノマトペの使用の範囲では観察されにくいこうした表現もマンガにおいては多く見られた。

(4) CV 単独のオノマトペ

- | | |
|---|-------------------|
| ガ | (藤田和日郎『うしおととら』) |
| コ | (藤田和日郎『うしおととら』) |
| ゴ | (藤田和日郎『うしおととら』) |
| ボ | (藤田和日郎『うしおととら』) |
| ヴ | (藤田和日郎『うしおととら』) |
| む | (室山まゆみ『あさりちゃん』) |
| ぐ | (室山まゆみ『あさりちゃん』) |
| ぬ | (臼井義人『クレヨンしんちゃん』) |

(5) 語幹が用いられるもの

- | | |
|------|-------------------------|
| げそー | <げっそり (臼井義人『クレヨンしんちゃん』) |
| どよー | <どんより (小栗左多里『ダーリンは外国人』) |
| どよーん | <どんより (一条ゆかり『有閑倶楽部』) |
| しわーっ | <しわしわ (小栗左多里『ダーリンは外国人』) |

(6) 既存オノマトペの音韻に変更を加えたもの (cf. (1d))

- | | | |
|-----------------|------------------|------------------|
| によつ(nyoQ) | <にゅつ(nyuQ) | (高橋留美子『めぞん一刻』) |
| ザコ(zako) | <ザク(zaku) | (藤田和日郎『うしおととら』) |
| ほこほこ(hoko-hoko) | <ほかほか(hoka-hoka) | (室山まゆみ『あさりちゃん』) |
| ゲテゲテ(gete-gete) | <ゲラゲラ(gera-hera) | (室山まゆみ『あさりちゃん』) |
| にたらこにたらこ | <にたにた | (室山まゆみ『あさりちゃん』) |
| ぐわぶつ | <がぶつ | (室山まゆみ『あさりちゃん』) |
| ぐわたぐわたぐわた | <がたがたがた | (高橋留美子『めぞん一刻』) |
| グワングワングワン | <ガンガンガン | (松本零士『銀河鉄道 999』) |

(7) 一般的な表記では用いられない表現形

え ⁺ え ⁺ え ⁺ え ⁺	(高橋留美子『犬夜叉』)
ヴォン	(藤田和日郎『うしおととら』)
ヴォー	(松本零士『銀河鉄道 999』)
ヴァス ヴァス ヴァス	(松本零士『銀河鉄道 999』)
ヴォムヴォム	(松本零士『銀河鉄道 999』)
ヌ ⁺	(藤田和日郎『うしおととら』)
ヲ ⁺ ビオオオオ	(藤田和日郎『うしおととら』)
ブラ	(藤田和日郎『うしおととら』)
バヂ	(藤田和日郎『うしおととら』)
ヂヂヂヂヂ	(手塚治虫『安達が原』)
ブイーム	(松本零士『銀河鉄道 999』)
ボム	(手塚治虫『安達が原』)
バタム	(日渡早紀『ぼくの地球を守って』)
んふっ	(室山まゆみ『あさりちゃん』)
んきゅ	(藤田和日郎『うしおととら』)

さらに、Hamano (1998)、那須 (1999) では、オノマトペの音韻的特徴として、二重有声語幹では第二子音(C2)において単音 p の出力が避けられていると一般化されているが、マンガにおいては(9)のような表現が例外的に現れることがあるようである⁴。

(8) 二重有声語幹 (Hamano 1998, 那須 1999)

- a. zaba-, zabu-, zubo-, zuba-, dabo-, dabu-, dobo-, dobu-, gebo-, gebu-, gabo-, gabo-, gobo-
b. *zapa-, *zapu-, *zupo-, *zupu-, *dapa-, *dapo-, *dopu-, *gepo-, *gepu-, *gapa-, *gapo-, *gapu-, *gopo-

(9) ギバ(gipa)

- (藤田和日郎『うしおととら』)
ゴポボン(gopopoN) (藤田和日郎『うしおととら』)
ゴポポポポー(gopopopopoR) (松本零士『銀河鉄道 999』)

また、(10)のように、既存のオノマトペを組み合わせたと見られる表現も複数例観察された。

(10) オノマトペを組み合わせたもの(cf. (1b))

- ギヒュン <ギ+ヒュン (藤田和日郎『うしおととら』)
グキュー <グ+キュー (富田誠『金色のガッシュ!!』)
ドザー <ド+ザー (松本零士『銀河鉄道 999』)
シュボンシュボンシュボン <シュ+ボン (松本零士『銀河鉄道 999』)

一般語彙をもとにしたと思われる表現では、詩のオノマトペの新造表現では「つぶ(粒)」→「つぶつぶ」(宮沢賢治『詩ノート』)や「みづ(水)」→「みづみづ」(宮沢賢治『春と修羅』)、「降る」→「ふるふる」(山田今次『雨』)などの CVCV 反復形が主であった(井上 2007a, 2007b)。それに対し、マンガの新造表現は(11)に見るように、一般語彙をそのままオノマトペ的に用いる例が多く見られた⁵。

(11) 一般語彙をもとにしたもの (cf. 夏目 1997: 122-124)

- めくり <めくる (臼井義人『クレヨンしんちゃん』)

ナデ <なでる

みせびらかしっ	<見せびらかす (室山まゆみ『あさりちゃん』)
おだんごっ	<おだんご (渡瀬悠宇『ふしぎ遊戯』)
やぶへびっ	<藪蛇 (室山まゆみ『あさりちゃん』)
さっそー	<颯爽 (高橋留美子『めぞん一刻』)
のーなしー	<能無し (室山まゆみ『あさりちゃん』)
キーク	<キック (室山まゆみ『あさりちゃん』)
ビーム	(魔夜峰夫『バタリロ!』)
決心	(渡瀬悠宇『ふしぎ遊戯』)
硬直	(一条ゆかり『有閑倶楽部』)
熱心	(えらけいこ『あたしんち』)
気合い	(高橋留美子『めぞん一刻』)

3.3 比喩的な新造オノマトペ

また、表現自体は既存のものでも、用いられ方が一般的なものと異なるものも見られた。例えば、(12)に挙げる「じゅー(っ)」は、『日本語オノマトペ辞典』(小学館)によると、(13)のように定義されており、擬音語用法が一般的であると思われる。しかし、(12)においては「人物が落ち込む様子」という心理状態の描写へ(すなわち、擬音語用法から擬態語用法へ)転用された比喩的な転用例であるといえる。このことは、井上 (2008) で論じた既存オノマトペの意味拡張の方向性と一致する。さらに、以上のパターンに当てはまらない(14)のようなまったく新奇の表現も複数観察された。

(12) 用法のずらし (cf. 滝浦 1996)

- じゅーっ (室山まゆみ『あさりちゃん』)

(13) 「じゅー(っ)」の定義(『日本語オノマトペ辞典』小学館)

- a. 高温に熱したものを、冷たい液体の中に入れたときに出る音。水気のあるものが熱気に当たって、しゅんかんてきに蒸発する音。
b. 液体が吸いこまれる際の大きくひびく音。また、そのさま。

(14) まったくの新造形(cf. (1e))

- ナゲーッナゲーッ (手塚治虫『ロロの旅路』)
シャゴシャゴシャゴ (手塚治虫『百物語 (第二部 恐山編)』)
しゃんかしゃんかしゃんか (けらえいこ『あたしんち』)
みゅーんみゅーん (室山まゆみ『あさりちゃん』)
みじみじ (小栗左多里『ダーリンは外国人』)

4. まとめと今後の課題

以上、既存のオノマトペ表現では稀であると思われる 1 モーラのオノマトペ表現や、有声語幹において制限されるはずの単音 p の出現を許すようなオノマトペ表現が例外的に見られるなど、既存オノマトペのもつ特徴から逸脱した表現パターン

ンがマンガにおいては数多く見られることが今回明らかとなった。中でも、通常濁音化されない音韻の濁音化や、通常は反復されない母音や撥音の反復形が見られた点はマンガのオノマトペ表現に特徴的であったといえる。これは、既存のオノマトペ表現を撥音化、あるいは濁音化することによって、撥音や有声音の持つ音象徴的效果を作者がねらった創造性豊かな用例であるといえる。今後はさらに用例を収集し、既存のものから逸脱したオノマトペの表現形の創作と理解の仕組みに関し、認知言語学的観点から考察を深めていく。

注

¹ kazzing@gs.lang.osaka-u.ac.jp

² 本稿では、生物や物の発する音声を模倣して描写する「擬音(声)語」と、物事の様態や感覚、印象等を象徴的に描写する「擬態語」を総称して、「オノマトペ」と呼ぶ。

³ “The short vowels, /i, e, a, o, u/ indicate that the event is completed instantaneously or that indicate the distance involved is short. The long vowels, /ii, ee, aa, oo, uu/ indicate that the action takes longer spatially or temporally and is more strenuously carried out.” (Hamano 1998: 72)

⁴ “N indicates that the direction of the motion or the quality of the sound changes toward the end. That is, it indicates that there is a reaction to or reverberation after the initial movement. It may indicate that the object is flexible or elastic and is capable of such reactions or reverberations.” (Hamano 1998: 67)

⁵ 本研究は、こうしたオノマトペの既存表現に関する一般化を否定するものではないことにふれておく。マンガにおいては作者の創作により一般的なオノマトペの表現形から逸脱した新奇の表現形が現れやすい傾向にあり、そうした表現を排除するのではなく、より詳細に例外として記述すべきであるとする立場を取るものである。

⁶ 夏目(1997)においては、こうした表現は「オノマトペ的に使われたマンガ用語としての名詞」とされている(夏目 1997: 122-124)。このような表現をオノマトペと見なすことができるかどうかについては議論の余地があるが、こうした表現が、Waida (1984) が「オノマトペ標識 (onomatopoeia marker)」(Waida 1984: 57)とよぶ、促音・撥音・「り」・母音の長化・反復といった日本語オノマトペが伴う形態的特徴を伴っている場合が多いことは、作者によってオノマトペ的な用いられ方が意図され、また読者がそれらをオノマトペ的な表現として読み取る可能性が十分にあるということを示唆している。

参考文献

- Bybee, Joan L. (1988) “Morphology As Lexical Organization.” In Michael Hammond and Michael Noonan (eds.), *Theoretical Morphology: Approaches in Modern Linguistics*. Academic Press, 119-141.
- . (2001) *Phonology and Language Use*. Cambridge University Press.
- Hamano, Shoko (1998) *The Sound-Symbolic System of Japanese*. CSLI Publications.

飯島英一 (2004) 『日本の猫は副詞で鳴く、イギリスの猫は動詞で鳴く』朱鳥社。

井上加寿子 (2007a) 「新造オノマトペの音韻・形態的特徴：頻度の効果の観点から」『言語文化研究科共同研究プロジェクト 2006：文化とレトリック』, 73-82. 大阪大学大学院言語文化研究科。

———. (2007b) 「新造オノマトペを通してみる有声音・無声音の音象徴とその比喩性：SD 法による分析を中心に」『KLS (Kansai Linguistic Society) 27』, 45-55. 関西言語学会。

———. (2008) 「オノマトペの感覚間の転用と意味拡張：擬音語・擬態語の拡張例を中心に」『言語文化共同研究プロジェクト 2007：メタファーとスキーマ』, 57-67. 大阪大学大学院言語文化研究科。

Takehi, Hisao, Ikuhiro Tamori, and Lawrence Schourup. (1996) *Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*. Mouton de Gruyter.

寛壽雄 (1993a) 「一般語彙となったオノマトペ」『月刊言語』 Vol.22, No.6, 38-45.

———. (1993b) 「文学作品に見られるオノマトペ表現の日英対照」寛壽雄・田守育啓 (編) 『オノマトピア：擬音・擬態語の楽園』, 127-144. 勁草書房。

木下栄造 (2004) 「擬声語・擬態語の情報源としてのマンガ」『マンガ研究』 Vol.6, 134-146. 日本マンガ学会。

那須昭夫 (1999) 「オノマトペにおける有聲化と[p]の有標」『音声研究』第3巻第3号, 52-66.

———. (2004) 「新造オノマトペの音韻構造と分節の無標性」『日本語科学』16, 69-91.

夏目房之介 (1997) 『マンガはなぜ面白いのか：その表現と文法』NHK 出版。

小野正弘(編) (2007) 『日本語オノマトペ辞典』小学館。

宇阪直行 (編著) (1999) 『感性のこぼれを研究する：擬音語・擬態語に読む心のありか』新曜社。

滝浦真人(1996) 「宮沢賢治のオノマトペ：補論・〈見立て〉られたオノマトペ」『共立女子短期大学紀要』第39号, 35-148.

田守育啓 (2002) 『オノマトペ：擬音・擬態語を楽しむ』岩波書店。

———. (2004) 「宮沢賢治のオノマトペ」, 影山太郎・岸本秀樹 (編) 『日本語の分析と言語類型：柴谷方良教授還暦記念論文集』くろしお出版, 199-214.

Waida, Toshiko. (1984) “English and Japanese Onomatopoeia.” 『女子大文学 (外国文学篇)』大阪女子大学英文学科, 第36号, 55-79.

用例出典

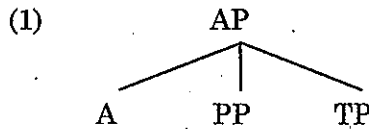
- 『あさりちゃん』(室山まゆみ, 小学館)
- 『あたしんち』(けらえいこ, メディアファクトリー)
- 『ぼくの地球を守って』(日渡早紀, 白泉社)
- 『ダーリンは外国人』(小栗左多里, メディアファクトリー)
- 『ふしぎ遊戯』(渡瀬悠宇, 小学館)
- 『銀河鉄道 999』(松本零士, 小学館)
- 『大夜叉』(高橋留美子, 小学館)
- 『じゃりん子チエ』(はるき悦巳, 双葉社)
- 『金色のガッシュ!!』(雷句誠, 小学館)
- 『クレヨンしんちゃん』(臼井義人, 双葉社)
- 『めぞん一刻』(高橋留美子, 小学館)
- 『美味しんぼ』(作: 雁屋哲, 画: 花咲アキラ, 小学館)
- 『バタリロ!』(魔夜峰夫, 白泉社)
- 『手塚治虫名作集』(手塚治虫, 集英社)
- 『百物語』, 『安達が原』, 『荒野の七ひき』, 『ロロの旅路』
- 『うしおととら』(藤田和日郎, 小学館)
- 『有閑倶楽部』(一条ゆかり, 集英社)

‘It is adjective of DP to VP’構文の統語構造

玉木 晋太

u102559h@ecs.cmc.osaka-u.ac.jp

1. Introduction



- (2) a. How stupid of John was it to leave town?
b. How stupid of John it was to leave town! ((a)-(b) Stowell (1991: 125))
c. How stupid (it was) of her to make such a mistake! (Konishi (1989: 1796))
d. How wrong (it was) of you to say that to your mother! (Hornby (1975: 144))

2. Adjectives of ‘It is Adjective of DP to VP’ Constructions

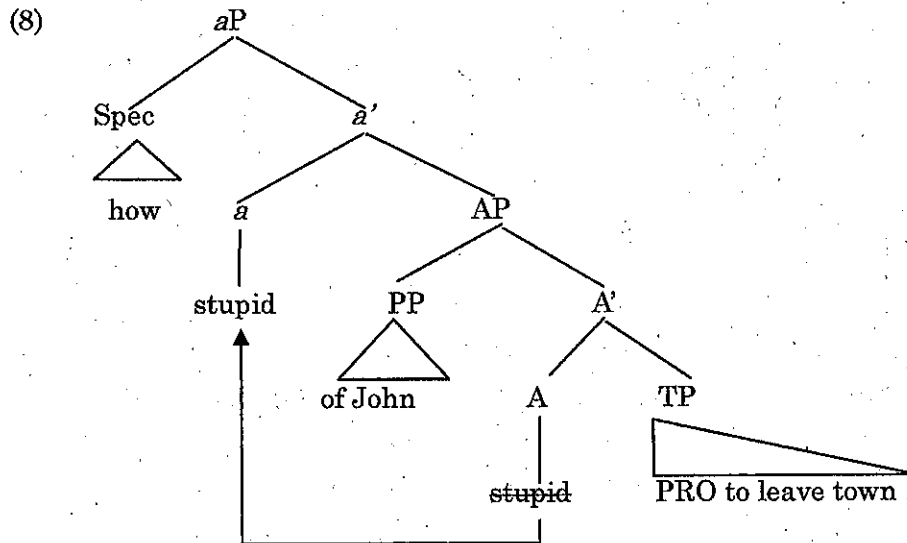
- (3) Adjectives which are called Class A(W) or mental property (MP) adjectives select a *of*-phrase and a *to*-infinitive as its complement.
- (4) a. *It was kind [*of*Bob] [*for* John to call the doctor].
(Silva and Thompson (1977: 114))
b. *It was very kind *of*you *for*you to send me a nice present.
(Yasui, Akiyama and Nakamura (1976: 131))
- (5) PRO, the subject of a *to*-infinitive, must be controlled by its antecedent, (*of*) DP.
- (6) a. It is [AP kind [PP *of*you_i]][TP PRO_i to take so much trouble].
b. *It is [AP kind [PP *of*you]][CP *for* [TP your sister to take so much trouble]].
((a)-(b) Matsubara (2000: 76))
c. *It was [AP very kind [PP *of*you]][CP *for* [TP you to send me a nice present]].
((c) Yasui, Akiyama and Nakamura (1976: 130))

3. Previous Analyses of Syntactic Structure

(7) Problems:

- (i) Wilkinson (1970) violates the No-Tampering Condition (NTC) (Chomsky (2005: 5)) and the Inclusiveness Condition (IC) (Chomsky (1995: 228, 2000: 113, 2001: 3, 2004: 107, 2005: 5)) because his structure involves the operation *of*-insertion.
- (ii) Stowell (1991) also violates the NTC and the IC because his structure involves the operation *of*-insertion. Further, in his structure, both *of* DP and *to*-infinitive are not in complement position.
- (iii) Bennis (2004) cannot account for how to derive *wh*-sentences.
- (iv) Maezawa (2005) cannot capture the fact that PRO in these constructions must be obligatorily controlled when the PP surfaces.

4. Syntactic Structures of 'It is kind of DP to VP' Constructions



- (9) a. To take so much trouble is [kind of you]. (Matsubara (2000: 74))
 b. [How stupid] (it was) of her to make such a mistake! (Konishi (1989: 1796))
 c. [How stupid of John] was it to leave town? (Stowell (1991: 125))

5. Two Alternative Analyses

5.1 Split-Spellout

- (10) *What hope* could there be *of finding survivors*?
 (11) [*What hope of finding survivors*] could there be [*what hope of finding survivors*].
 (12) [*What hope of finding survivors*] could there be [*what hope of finding survivors*].
 ((10)-(12) Radford (2004: 194))

5.2 An Alternative Analysis on Radford's (2004) Analysis of Split-Spellout

- (13) a. How stupid (it was) of her to make such a mistake! (Konishi (1989: 1796))
 b. How stupid of John was it to leave town? (Stowell (1991: 125))
 (14) a. [*How stupid of her to make such a mistake*] (it was) [*how stupid of her to make such a mistake*]! (Konishi (1989: 1796))
 b. [*How stupid of John to leave town*] was it [*how stupid of John to leave town*]?
 (Stowell (1991: 125))

5.3 Chomsky's Phase Analysis

(15) Phase Analysis:

- (i) Phases are propositional in nature and include CP and v*P.
- (ii) A phase head has two features: edge-feature (EF) and Agree-feature.
- (iii) All syntactic operations involve a relation between a *probe* (P) and a *local goal* (G). EF and Agree-feature become a *probe* and search a *goal*.

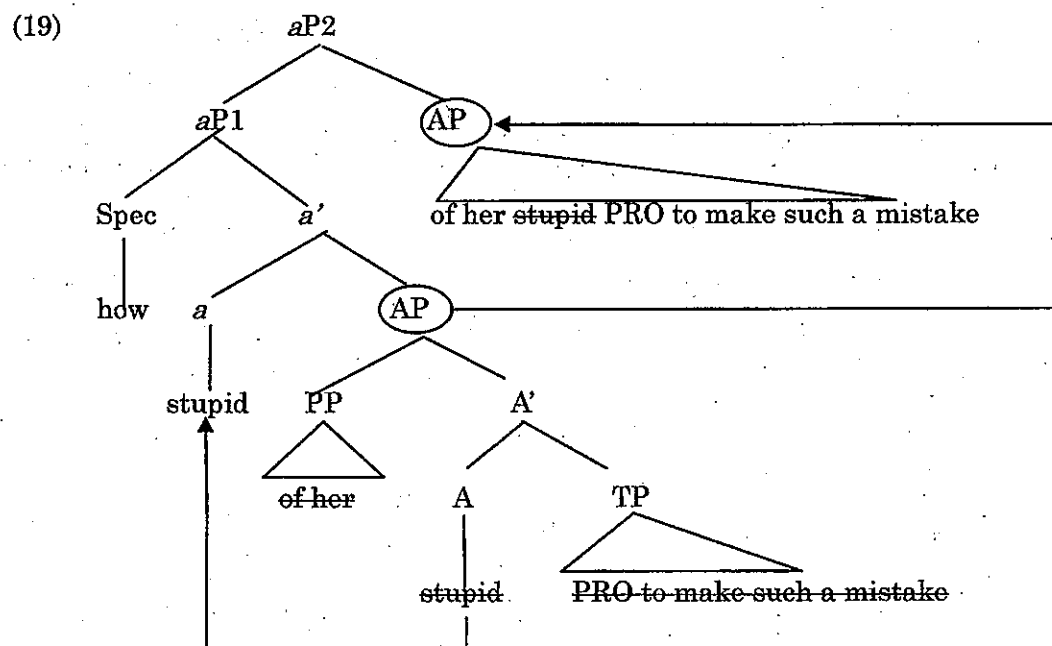
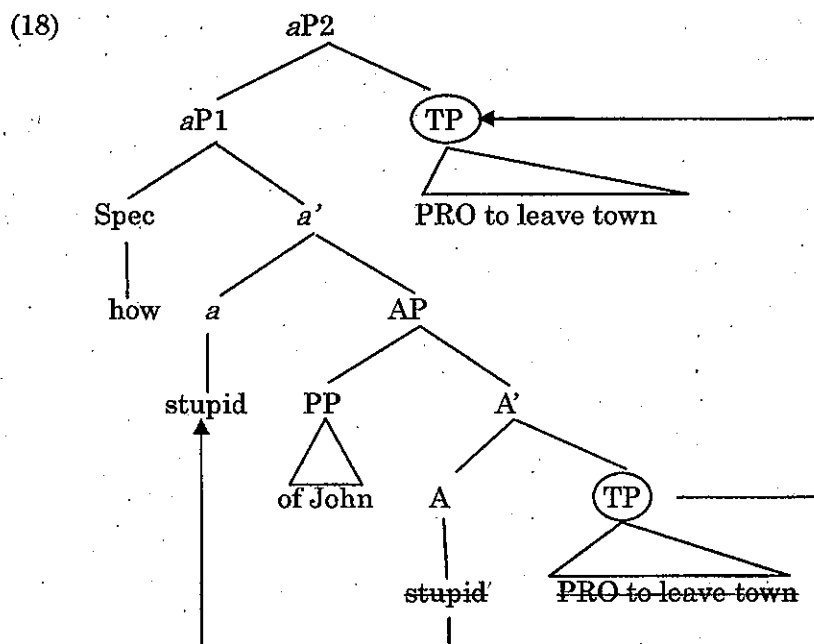
5.4 An Alternative Analysis on Chomsky's Phase Analysis and A Remaining issue

(16) *Complete Functional Complex (CFC)*

A CFC is a projection containing all grammatical functions compatible with its head. (Chomsky (1995: 102))

(17) a. How stupid of John was it to leave town? (Stowell (1991: 125))

b. How stupid (it was) of her to make such a mistake! (Konishi (1989: 1796))



(20) *Equidistance*

Two targets of movement are equidistant if they are in the same minimal domain. (Chomsky (1995: 185))

(21) *How stupid of John to leave town of John!

6. Conclusion

References

- Bennis, H. (2004) "Unergative Adjectives and Psych Verbs," *The Unaccusativity Puzzle: Explorations of the Syntax-Lexicon Interface*, ed. by A. Alexiadou, E. Anagnostopoulou and M. Everaert, 83-113, Oxford University Press, Oxford.
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, N. (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," In *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by R. Martin, D. Michaels, and J. Uriagereka, MIT Press, Cambridge.
- Chomsky, N. (2001) "Derivation by Phase," In *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by M. Kenstowicz, MIT Press, Cambridge.
- Chomsky, N. (2004) "Beyond Explanatory Adequacy," In *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 3*, ed. by A. Belletti, Oxford University Press, New York.
- Chomsky, N. (2005) "On Phases," ms., MIT.
- Hornby, A. S. (1975) *A Guide to Patterns and Usage in English*, Oxford University Press, London.
- Konishi, T. (1989) *Eigo Kihon Keiyoshi · Fukushi Jiten* (A Dictionary of English Word Grammar on Adjectives and Adverbs), Kenkyusha, Tokyo.
- Maezawa, H. (2005) "A Syntactic Analysis of Class W Adjectives," *JELS* 22, 71-80.
- Matsubara, F. (2000) "Syntax and Semantics of *of* in the Construction "*It is A(djective) of NP to VP*" – Synchronic and Diachronic Approaches –," *Studies in Modern English* 16, 71-84.
- Radford, A. (2004) *Minimalist Syntax*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Silva, G., and S. A. Thompson. (1977) "On the Syntax and Semantics of Adjectives with '*It*' Subjects and Infinitival Complements in English," *Studies in Language* 1: 1, 109-126.
- Stowell, T. (1991) "The Alignment of Arguments in Adjectival Phrases," *Syntax and Semantics* 25: *Perspectives on Phrase Structure*, ed. by Susan D. Rothstein, 105-135, Academic Press, New York.
- Watanabe, T. (1989) *Eigo no Gohoo Kenkyu · Jussio* (English Usage Studies in Ten Chapter), Taishukan, Tokyo.
- Wilkinson, R. (1970) "Factive Complements and Action Complements," *CLS* 6, 425-444.

Possessive Relation Disambiguation of Japanese Genitive Marker *No*

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程1年

西口 純代 Sumiyo Nishiguchi

Abstract

The Japanese genitive marker *no* is semantically ambiguous and denotes an wider range of relations between two entities than the English possessive marker *'s*. It has been suggested that inherently relational possessee nominals as in *John's father* disambiguates the relation (Partee 1997, Barker 1995) and that even a non-relational possessee noun as in *John's poem* can be type-raised into a relational noun based on the Qualia Structure (Vikner & Jensen 2002, Pustejovsky 1995). Since possessive relations can be even reversed in Japanese as in *kaban-no hito* (lit. bag's lady, the lady who has a bag), I will argue that the Qualia Structure of not only the possessee but also the possessor nominal disambiguates the possessive relations. Possessor nouns are coerced to type-shift into relational nouns.

1. Various Possessive Relations and Argument Reversal

Japanese genitive marker expresses a wider range of relations between two entities than the English possessive. 'NP1-GEN NP2' expresses not only possession as in *John's pen* and part-whole relation as in *John's leg*, but also location, accompaniment, property and quantity as shown on Table 1.

Note the reversal of the possessor argument between (I) and (IV-V). The possessor argument is NP1 in (1), as in the English possessive *Tanaka's bag* whose possessor argument is Tanaka. On the contrary in (5), the possessor of the bag is NP2 *hito* (person) and there is no English equivalent *red bag's person*. In (11) *Kaban-no Sanpei* (Bags Sanpei), *Sanpei* is a bag store, and therefore the possessor of a bag.

Such non-canonical relations, i.e., relations other than possession or part-whole relation, are more likely expressed in noun compounds such as *magic land* and *1 kg* in English.

Table 1

Adjectival property	Relation	Japanese possessive	English possessive	English compound
Intersective	I. Possession $R = \{ \langle x, y \rangle \mid x \text{ owns } y \}$	(1) Tanaka-no kaban	Tanaka's bag	*Tanaka bag
	II. Part-whole $R = \{ \langle x, y \rangle \mid y \text{ is part of } x \}$	(2) Tanaka-no te	Tanaka's hand	*Tanaka hand
	III. Location $R = \{ \langle x, y \rangle \mid y \text{ is in } x \}$	(3) Tokyo-no Shinseki	*Tokyo's relative	a Tokyo relative
	IV. Accompaniment $R = \{ \langle x, y \rangle \mid y \text{ carries } x \}$	(4) boshi-no fujin	*hat's lady	a hat lady
		(5) akai kaban-no hito	*red bag's lady	a red bag lady
	V. Property $R = \{ \langle x, y \rangle \mid x \text{ is dominant characteristic of } y \}$	(6) aka-no jaketto	*red's jacket	a red jacket
		(7) inu-no onna-no ko	*dog's girl	*a dog girl (a girl dog)
(8) osu-no tora		*male's tiger	a male tiger	
(9) maaruboro-no kuni		Marlboro's country	Marlboro Country	
(10) maho-no kuni		*magic's country	a magic country	
(11) Kaban-no Sanpei		*Bags' Sanpei	Bags Sanpei	
VI. Quantity $R = \{ \langle x, y \rangle \mid \text{the quantity of } y \text{ is } x \}$	(12) Supa-no Maruetsu	*Supermarket's Maruetsu	Maruetsu Supermarket	
	(13) san-bon-no enpitsu	*three's pencils	three pencils	
Nonintersective	VII. Property $R = \{ \langle x, y \rangle \mid x \text{ is a property of } y \}$	(14) 1-kiro-no pasokon	*1kg's computer	a 1kg computer
		(15) nise-no fukahire	*false's shark fin	false shark fin
		(16) nise-no keisatsukan	*false's police officer	false police officer

2. Problems with Deriving Various Possessive Relations from Possessor Nouns

Possessive relations are ambiguous in both English and Japanese. For example, there is more than one interpretation available for *Tanaka-no hon* (Tanaka's book). *Tanaka's book* may refer to the book that Tanaka owns or the book that Tanaka wrote (Barker 1995: 87). Langacker (1993) considers ownership to be the prototypical meaning of the possessive construction, and other relations to be the instantiations. Partee (1997) analyzes possessive relations in two kinds: a free relation *R* that is contextually supplied and inherent relations inherited from relational nouns, e.g., *brother*, *employee*, and *enemy*. For example, *sister* is inherently relational and its lexical entry would be: $\lambda z.\lambda y.sister\text{-}of(z)(y)$:

(17) Syntax: [John's]*NP/TCN* (TCN: transitive common noun)

Semantics: $\lambda R.\lambda P.[\exists x[\forall y[R(j)(y) \leftrightarrow y = x] \wedge P(x)]]$

(18) Syntax: [[John's]*NP/TCN* [*sister*]*TCN*]*NP*

Semantics: $\lambda R.\lambda P.[\exists x[\forall y[R(j)(y) \leftrightarrow y = x] \wedge P(x)]](\lambda s.\lambda t.sister\text{-}of(s)(t))$

$= \lambda P.[\exists x[\forall y[sister\text{-}of(j)(y) \leftrightarrow y = x] \wedge P(x)]]$

Possession relation (I) is prototypical and part-whole relation (II) can be derived lexically from a possessive nominal *te* (hand) in (2) (Barker 1995). However, other possessee nominals are not necessarily relational. *Tomodachi* (friend) (3) is relational, i.e., *friend-of* *x*, but the relation between NP1 and NP2 is not *friend-of* but of location, namely, *NP2 is in NP1*. As long as we only consider NP2 and apply (18), there is no way to derive location, carrying, property and quantity relations. For instance, there is no way to type-shift non-inherently relational noun *pasokon* (personal computer) in (14) into a relational noun. Since weight is not part of the qualia structure, we cannot apply the strategy in Vikner & Jensen (2002), namely, the application of Q_α as a type-raising function from a word to a relational noun with an unsaturated argument slot.

(19) $\left(\begin{array}{l} \text{pasokon (personal computer)} \\ \text{TYPESTR} = \text{ARG1} = \boxed{x} \text{artifact_machine} \\ \text{ARGSTR} = \left(\begin{array}{l} \text{D-ARG1} = \boxed{w} \text{human} \\ \text{D-E1} = \boxed{e_1} \text{transition} \\ \text{D-E2} = \boxed{e_2} \text{process} \end{array} \right) \\ \text{QUALIA} = \left(\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \boxed{x} \\ \text{CONSTITUTIVE} = \{\text{system unit, monitor, keyboard, ...}\} \\ \text{TELIC} = \text{calculate_act}(\boxed{e_2}, \boxed{x}) \\ \text{AGENTIVE} = \text{make_act}(\boxed{e_1}, \boxed{z}, \boxed{x}) \end{array} \right) \end{array} \right)$

The item-weight relation is not able to substitute for free *R* between NP1 and NP2 since none of the 'inherent' telic (purpose), argument, constitutive or formal role supplies such a relation.

Furthermore, neither accompaniment nor property relations derives from the qualia structure of the possessor noun. *Fujin* (lady) does not inherently carry a hat, so it is difficult to consider carrying or wearing as a part of the qualia structure. The relation between *Sanpei* and its trade is hard to derive without comparing with the possessor noun.¹ Therefore, I propose that Japanese possessives need to consider the qualia structure of the possessor noun as well.

3. Relation Disambiguation by Possessor Noun

3.1 Type-Shifting Possessor into a Relational Noun

In III-VII, it is the possessor nominals than the possessee nominals that carry more information about relations between two arguments. For example, *Tokyo* is a location, a *bag* is something to carry with, and *aka* (red), *onna* (woman) and *1-kiro* (1 kg) are properties. Even though these nouns are not lexically relational, as *brother* is, our general knowledge that Tokyo is a location, a hat is a thing to wear, *female* is a property and *1 kg* is a weight assigns accompaniment, locative and property interpretations to the possessive construction.

Therefore, we need to consider the lexical interpretations of non-relational possessor nouns and apply the type-shifting operators to the possessor noun in Japanese. Vikner & Jensen (2002) apply the Qualia Structure (Pustejovsky 1995) of the possessee noun and type-shift the possessee noun into a

¹ Shimazu et al. (1986) proposes comparing semantic features of both NP1 and NP2.

relational noun. For example, *John's poem* can be interpreted as the poem that John composed by means of the meaning shifting operator Q_A that raises *poem* into a two-place holder (19). Then, the type-shifted NP2 combines with the possessive NP and the authorship relation is derived.

$$(20) Q_A(\text{poem}) = \lambda x \lambda y [\text{poem}'(x) \ \& \ \text{compose}'(x)(y)]$$

Japanese possessives need to look at the Qualia Structure of the possessor noun. The functions Q_F , Q_T , and Q_C type-shift the possessor noun and various relations are inherited from the lexical input of the possessors respectively.

3.2 Possessive Phrases are (Non)intersective Adjectives

English possessives have been considered as determiners as in Partee (1997). However, in addition to the fact that Japanese is a language without overt determiners, semantically speaking, Japanese 'NP1-no' is intersective or nonintersective adjective rather than a determiner. For example, *ao-no wanpisu* (blue-GEN dress) refers to a dress whose color is blue, and *boshi-no fujin* (a lady with a hat) refers to a lady who wears a hat. Most of the 'NP1-no' phrases refer to the intersection of the two sets denoted by NP1-no and NP2. The denotations of *ao-no* (blue), *boshi-no* (with a hat), *Tokyo-no* (in Tokyo), *Tanaka-no* (Tanaka's) and *san-bon-no* (three) are the sets of blue things, those wearing a hat, those in Tokyo, Tanaka's belongings and those whose cardinality is three. Since the modified nouns also denote the sets, e.g., *wanpisu* (the set of dresses), *fujin* (the set of ladies) and *shinseki* (the set of relatives), 'NP1-no NP2' refer to the intersection of two sets, namely, the sets of blue dresses, ladies wearing hats, relatives in Tokyo and so on.

- (21) a. $[| \text{wanpisu} |] = \lambda x. \text{dress}'(x)$
 b. $[| \text{ao-no} |] = \lambda x. \text{blue}'(x)$
 c. $[| \text{ao-no wanpisu} |] = \lambda x. \text{blue}'(x) \ \& \ \text{dress}'(x)$
- (22) a. $[| \text{Tokyo-no} |] = \lambda x. \text{in-Tokyo}'(x)$
 b. $[| \text{shinseki} |] = \lambda x. \text{relative}'(x)$
 c. $[| \text{Tokyo-no shinseki} |] = \lambda x. \text{in-Tokyo}'(x) \ \& \ \text{relative}'(x)$

Similar to English *fake*, neither *nise-no* nor *magai-no* (fake, false) is intersective in that *nise-no keisatsukan* (false police officer) is not a policeman at all. *Nise-no* does not compose with extensions of police officers but with intensions.

3.3 Accompaniment: Type-raising by Telic Role

Predicate Modification Rule, which is widely used for noun modification, combines a possessive phrase the following noun. NP1 is type-raised into a two-place holder by means of the type-shifting operator Q_T which applies the telic role of NP1. *No* introduces a choice function f in Reinhart (1997) which lowers the type of 'NP1-no' into an adjective type.

- (23) Predicate modification: $\lambda x. [P(x) = Q(x)] = \lambda x. [P(x) \ \& \ Q(x)]$ (Heim & Kratzer 1998)

- (24) *Boshi-no fujin* (a lady with a hat)

- a. *boshi-no fujin*: $\lambda x. [\text{lady}'(x) \ \& \ \text{wear}'(y)(x) \ \& \ \text{hat}'(y)]$
 b. *boshi*: $\lambda x. \text{hat}'(x)$
 c. *no*: f
 d. $Q_T(\text{boshi}) : \lambda x. \lambda y. [\text{wear}'(y)(x) \ \& \ \text{hat}'(x)]$
 e. $\text{no}(Q_T(\text{boshi})) : \exists f. \lambda x. [\text{CH}(f) \ \& \ \text{wear}'(f(\text{hat}))(x)]$
 f. *boshi-no fujin*: $\exists f. \lambda x. [\text{CH}(f) \ \& \ \text{wear}'(f(\text{hat}))(x) \ \& \ \text{lady}'(x)]$

$$\left(\begin{array}{l} \text{boshi (hat)} \\ \text{TYPESTR} = \text{ARG1} = \boxed{x} \text{ clothing_artifact} \\ \text{ARGSTR} = \left(\begin{array}{l} \text{D-ARG1} = \boxed{w} \text{ human} \\ \text{D-ARG2} = \boxed{z} \text{ human} \\ \text{D-E1} = \boxed{e_1} \text{ transition} \\ \text{D-E2} = \boxed{e_2} \text{ state} \end{array} \right) \\ \text{QUALIA} = \left(\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \boxed{x} \\ \text{CONSTITUTIVE} = \text{material} \\ \text{TELIC} = \text{wear_result}(\boxed{e_2}, \boxed{w}, \boxed{x}) \\ \text{AGENTIVE} = \text{make_act}(\boxed{e_1}, \boxed{z}, \boxed{x}) \end{array} \right) \end{array} \right)$$

3.4 Property: Type-raising by Telic Role

(25) 1-kiro-no pasokon (a personal computer of 1 kg),

- a. $1\text{ kg} : \lambda x. 1\text{ kg}'(x)$
 b. $Q_c(1\text{ kg}) = \lambda x. 1\text{ kg}'(x)$
 c. $\text{no}(Q_c(1\text{ kg})) = \exists f.[\text{CH}(f) \ \& \ f(1\text{ kg})]$

$$\left(\begin{array}{l} \text{1-kiro '1 kg'} \\ \text{TYPESTR} = \text{ARG1} = \boxed{x} \text{ weight_unit_of_measurement} \\ \text{ARGSTR} = \left(\begin{array}{l} \text{D-ARG1} = \boxed{y} \text{ physobj} \\ \text{D-ARG2} = \boxed{w} \text{ human} \\ \text{D-E1} = \boxed{e_1} \text{ process} \\ \text{D-E2} = \boxed{e_2} \text{ state} \end{array} \right) \\ \text{QUALIA} = \left(\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \boxed{x} \\ \text{CONSTITUTIVE} = 1\text{ kg}(\boxed{y}) \\ \text{TELIC} = \text{measure_act}(\boxed{e_1}, \boxed{w}, \boxed{y}) \end{array} \right) \end{array} \right)$$

(26) Maaruboro-no kuni 'Marlboro Country'

- a. $Q_t(\text{Marlboro}) = \lambda x. \lambda w. [\text{Marlboro}'(x) \ \& \ \text{make}'(x)(w)]$
 b. $\text{no}(Q_t(\text{Marlboro})) = \exists f. \lambda w. [\text{CH}(f) \ \& \ \text{make}'(f(\text{Marlboro}))(w)]$
 c. $\text{kuni} : \lambda w. \text{country}'(w)$

$$\left(\begin{array}{l} \text{Marlboro} \\ \text{TYPESTR} = \text{ARG1} = \boxed{x} \text{ tobacco} \\ \text{ARGSTR} = \left(\begin{array}{l} \text{D-ARG1} = \boxed{w} \text{ human} \\ \text{D-E1} = \boxed{e_1} \text{ transition} \\ \text{D-E2} = \boxed{e_2} \text{ process} \end{array} \right) \\ \text{QUALIA} = \left(\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \boxed{x} \\ \text{AGENTIVE} = \text{make_act}(\boxed{e_1}, \boxed{w}, \boxed{x}) \\ \text{CONSTITUTIVE} = \boxed{x} \text{ tobacco} \\ \text{TELIC} = \text{smoke_act}(\boxed{e_2}, \boxed{w}, \boxed{x}) \end{array} \right) \end{array} \right)$$

While the metonymy between country and its people needs to be interpreted further, type-raising of Marlboro allows its telic role to account for the relation between Marlboro and country.

4.4 Location

(27) Tōkyō-no shinseki 'Tokyo relatives'

 $Q_r(\text{Tokyo}) = \lambda x. \lambda w. [\text{in}'(x)(w) \ \& \ \text{Tōkyō}'(x)]$

$$\left(\begin{array}{l} \text{Tōkyō} \\ \text{TYPESTR} = \text{ARG1} = \boxed{x} \text{ location} \\ \text{ARGSTR} = \left(\begin{array}{l} \text{D-ARG1} = \boxed{w} \text{ physobj} \end{array} \right) \\ \text{QUALIA} = \left(\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{in}(\boxed{w}, \boxed{x}) \\ \text{CONSTITUTIVE} = \text{in-Japan}(\boxed{x}) \end{array} \right) \end{array} \right)$$

5. Conclusion

Type-shift based on the Qualia Structure of NP1 disambiguates the relations between two entities in NP1-no NP2 construction.

Selected References

- Partee, Barbara H. (1997) "Genitives: a Case Study." Appendix to Theo M. V. Janssen, "Compositionality." In *Handbook of Logic and Linguistics* Elsevier Science Publishers, Amsterdam, 1997.
 Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon* MIT Press, Cambridge.
 Reinhart, Tanya (1997) "Quantifier Scopep: How Labor is Divided between QR and Choice Functions," *Linguistics and Philosophy* 20, 335-397.
 Shimazu, Akira, Shozo Naito and Hirosato Nomura (1986) "Joshi No ga Muzubu Meishi no Imikankei no Subcategorization," *Shizen Gengo Shori* 53:1, 1-8.
 Vikner, Carl and Per Anker Jensen (2002) "A Semantic Analysis of the English Genitive." *Interaction of Lexical and Formal Semantics. Studia Linguistica* 56: 191-226.

コーパス駆動的アプローチによる議論文の語彙的特徴分析

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程1年

三木 望

1. 背景と目的

議論文は、英語能力検定試験（例えば、英検1級、TOEFLやIELTSのライティング・セクション）で問われるレジスターであり、L2ライティングの研究では英語学習者と英語母国語話者の学生による議論文の比較がしばしば行われている。学習者がよく参考にする議論文はTOEFLモデルエッセイであるが、研究者は英語が母国語の学生による議論文であるLOCNESSを参照コーパスとしてよく使用する。その一方で、学習者の議論文のモデルとして社説を指摘する研究者もいるが、社説がプロのライターによって書かれている点が上記の二つと異なる。ジャンル研究に、Biber(1988)があるが、議論文に関しては7つの言語特徴を挙げているだけで、3つの議論文、TOEFLモデルエッセイ、LOCNESS、社説の特徴には不十分である。

本研究では、近年、議論文、アカデミックライティング、CDAで、発信者が受信者の間の心理的な距離をとる際に重要な役割を果たすと言われている代名詞に焦点をあてて、議論文の文法・語彙の一面面を明らかにすると共に、レジスターとジャンルの違いにも言及する(Clancy, 1980; Hyland, 2005; Petch-Tyson, 1998; Chafe, 1982; Pennycook, 1994; Hyland, 2005; Kuo, 1998; Tang & John, 1999; Kamio, 1994, 2001)。

2. リサーチエッション

本発表では、以上の点を踏まえて、下記の問いに答える。

- (1) 議論文における代名詞の役割は何か？
- (2) 議論文における professional writing と non-professional writing の違いは何か？

3. 方法論

本研究では議論文のテキストとしてTOEFLモデルエッセイ、米国と英国の学生の議論文を収集した英国LOCNESSと米国LOCNESS、英国高級紙4社(*The Times*, *The Guardian*, *The Independent*, *The Daily Telegraph*)から収集した英国高級紙社説コーパスをもとに、各コーパス間で生起度に統計的に有意な差のある語彙項目を抽出して、同じ議論文というレジスターのコーパスの違いを分析する。

3.1 データ

表2. 議論文コーパス

コーパス	総語数	異なり語
英国高級紙社説コーパス	1,180,907	34,682
Brit-LOCNESS	155,737	11,051
Ameri-LOCNESS	168,335	11,247
TOEFLモデルエッセイコーパス	97,397	6,056

3.2 分析方法

A. 特徴語分析:

特徴語: 対象コーパスで参照コーパスよりも統計的に頻度が高い語 (過剰使用語、positive keywords) と低い語 (過少使用語、negative keywords) を指す。本発表では特に positive keyword に注目する。

対象コーパス (英国高級紙社説、英国 LOCNESS、米国 LOCNESS、TOEFL モデルエッセイ)

参照コーパス (対象コーパスを除いた、その他の議論文コーパス)

例) 英国高級紙社説コーパス VS. 英国高級紙社説コーパス以外の議論文コーパス (英国と米国 LOCNESS、TOEFL モデルエッセイ)

B. 対応分析:

対応分析で、顕著な言語特徴 (例えば、代名詞) の使用頻度とコーパスの関係と傾向を把握する。

C. G スコア (Log-likelihood ratios)

異なるサイズのコーパスにおける特徴語の共起語の結合度を比較する為に用いる。

4. 結果と議論

●特徴語分析

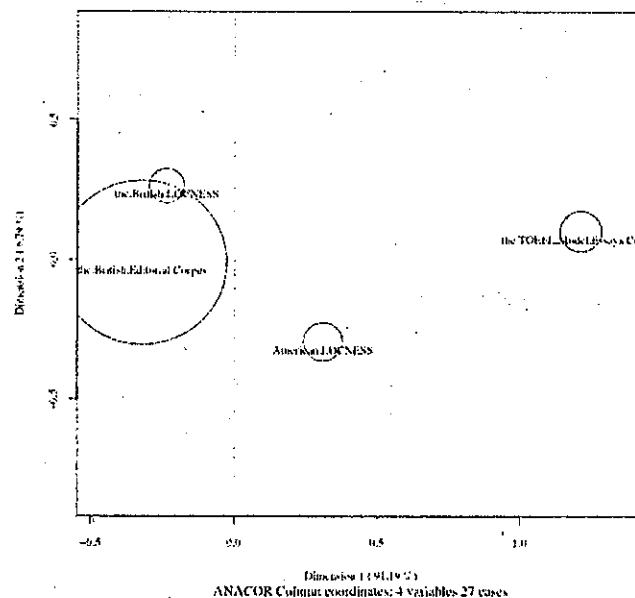
表1. 人称代名詞の positive keyword

英国高級紙社説コーパス				Brit-LOCNESS			
代名詞	Freq.	RC. Freq.	LL	代名詞	Freq.	RC. Freq.	LL
HIS	5,839	1,725	49.31	I	390	2,944	66.55
				THEY	771	6,730	65.69
Ameri-LOCNESS				TOEFL モデルエッセイコーパス			
代名詞	Freq.	Ref. Freq.	LL	代名詞	Freq.	Ref. Freq.	LL
THEY	1,365	6,079	409.52	I	1,985	1,249	6,998.78
I	690	2,543	322.47	MY	634	359	2,301.26
YOU	402	1,259	253.04	YOU	703	958	1,799.36
SHE	302	958	186.02	ME	299	148	1,126.91
HER	333	1,221	157.05	WE	847	3,503	899.16
MY	215	778	104.08	OUR	498	2,015	541.71
THEIR	940	5,549	99.52	YOUR	200	268	515.57
IM	31	24	69.68	THEY	963	6,480	475.93
THEM	349	2,064	36.5	THEM	294	2,119	124.54
IVE	13	9	30.82	MYSELF	37	27	123.54
ME	86	361	29.94	SHE	177	1,083	104.8
YOUR	86	382	25.85	WE'RE	13	17	33.91
				THEIR	589	5,900	90.29
				YOURSELF	24	32	61.99
				OURSELVES	20	63	28.29

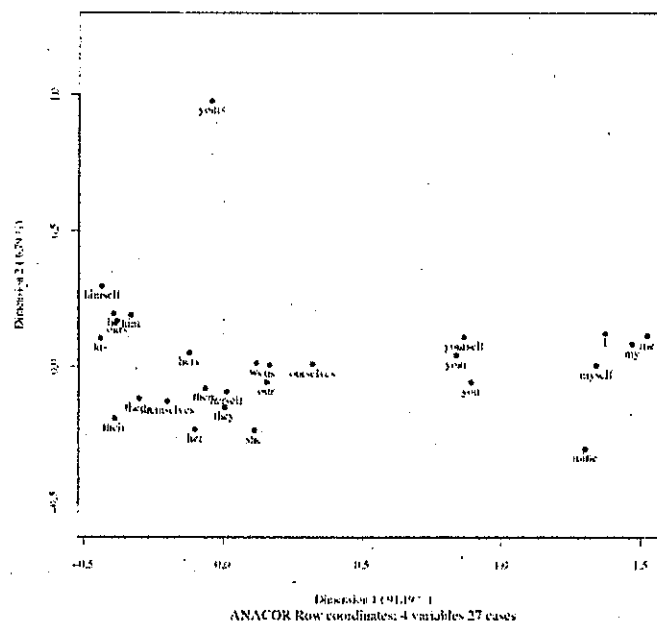
→英国高級紙社説コーパス以外は、I が上位に来ている。ただし、Brit-LOCNESS の尤度比は Ameri-LOCNESS と TOEFL モデルエッセイコーパスに比べて非常に低い。

→Ameri-LOCNESS と TOEFL モデルエッセイコーパスは I の次に you の尤度比が高い。

●対応分析



→議論コーパスが左右に分かれている



→一人称と二人称が議論コーパスの識別に大きく貢献している。

☆ TOEFL, Ameri-LONNESS, Brit-LOCNESS には people や person が特徴語に含まれていたが、社説にはなかった。→社説よりも他の議論文は人中心の構文が多いことを示唆している。

Ameri-LONNESS: PEOPLE (Freq. 864; LL 446.17), PERSON (Freq. 212; LL 309.56)

TOEFL Model Essays Corpus: PEOPLE (Freq. 786; LL 880.42), PERSON (Freq. 167; LL 317.69)

Brit-LOCNESS: PEOPLE (Freq. 777; 577.38)

●共起語

一人称単数:英国と米国のLOCNESSとTOEFLモデルエッセイでは一人称代名詞は、個人動詞のthinkやbelieve, feelと結びつきが非常に強かった

I thinkのGスコア:英国社説コーパス,90.9180; 英国LOCNESS 368.6900; 米国LOCNESS 347.7377; TOEFLモデルエッセイコーパス 1100.2779

→かなり個人的な意見を述べる際に使用されているが、社説ではGスコアが他と比較して著しく低い。

一人称複数形:

(1) 必要・義務を表わすshouldやmust, needと頻繁に共起している。

I believe that we should spend whatever money is required to explore outer space (TOEFL)

→語調を和らげている。

(2) Asの中でweを使用することによって、読者と一体感を強めつつ、自己の主張の確認や強調を。

As we report today, the Commission for Rural Communities is encouraging the Government to introduce a special category of council tax to deal with those who, in its opinion, do not live in their homes enough of the time to contribute properly to the health of their local economies. (The Brit-Edit Corpus)

(3) 意見を表わす動詞のthat節の中でweを使うことによって、主張を間接的に述べている。

二人称: if節やwhen節の中で使用されることが多い。

→筆者が仮想的な世界を作り出して、その中に読者を現実世界から引き離して巻き込み、主張を展開している。

If you attended a school which still utilized corporal punishment, you probably know like Tommy, - maybe you were a tommy - and you probably have a fairly strong opinion on corporal punishment in schools. (American LOCNESS)

5. 結論と今後の研究

(1) 社説以外の議論文コーパスはweやpeopleの頻度が高く、I thinkやI feelのような人を中心とした主語や個人動詞(private verb)が顕著で、個人的関与(personal involvement)の度合い強いのにに対して、英国社説コーパスにはこうした傾向が低く、代わりに代名詞の使用から筆者の隔離(detachment)の度合いが強い。

It should also be noted that the timing of the current allegations, weeks before the Italian general election, is no coincidence. (the Brit-Edi Corpus)

(2) 筆者と読者の間にコミュニティーが確立している新聞社説では、読者を常に意識して、己が前面に出過ぎないようにしながら主張を展開している。一方 non-professional writing の LOCNESS と TOEFL は主張が比較的ストレートである。

今後の課題: アメリカ英語とイギリス英語の代名詞の使用と議論文のレトリックの違いを探る。

※ 引用参考文献が必要な方はメールで申し上げます。

Email: u563877d@ecs.cmc.osaka-u.ac.jp